



• 0053973000 •

0053973-000

特500-768

女の匂ひと香

北川草彦・著

春陽堂

昭和6. 6

AIB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特500

768

1

特500

768

人の心と世

75

六年二月四日
刻本



雑誌 76 特 500-768

女の匂いと香



北川草彦

女と匂いと香りは
現代生活の核心である
だれせいらも余りも無知な現代
を嘲笑する



1 目 次

男は女を嗅ぐ.....3-17

男は女を嗅ぐ.....^{みいら}木伊乃は香液.....^{ペルシャ}波斯人と蔷薇.....好香
民族アラビヤ人.....香水の起源.....閨房の群香.....蔷薇の
香は情熱を喚ぶ.....^{ゴライアフラ}あれもれ・紫羅蘭花.....部屋に焚く香
花.....肉桂と白檀.....蔷薇香の神話.....玉體に香油を塗る
.....ユダヤ人の香料賣買.....クレオパトラと香匂.....甘桂
香.....食肉に香味をつけたヘブライ人.....信仰上の香料

乳房は藝術的象徴.....21-42

乳房は藝術的象徴.....乳房の研究.....乳房の正しい位置
.....女のどんな姿勢できめるか.....乳房の型態.....階級性

を語る乳房……乳房と年齢……人種的にみた乳房……乳房
へ唇肉を……流行と乳房……乳房をいじめる女……乳房は
衣裳美の中心……

西洋情愛観略史……………45—70

寛容猥褻時代……愛慾の女神ヴェナス・メフニス……柳腰
か豊臀か……Quim や Cunt よりも Cul の好愛……性の神は
海の泡……公然の肉體的疼愛……生殖力の旺盛な魚と鳩
……性的喚覚を刺戟する淫舞……古代羅馬人の入浴と腰
の踊……陽物崇拜と性的信仰……姦通の刑罰……創生記に
現れた性愛生活……モーセの律法と處女……初夜權の起
因……女淫に耽る僧侶……^{ソフィ}男色は兇惡……舊約全書に現れ
た男色……哲學者と美少年……寢室と浴室……腐視的興味
……男色俱樂部

都會生活を享樂する心理……………83—95

都市とブルジョア……享樂機關が生んだ「新しい群衆」……
都市と賣笑ギルド……酒場・カフェの享樂心理……銀座に
現れた變態的流行現象……都會人の獵奇心と戀慾心理

抱擁と接吻……………97—116

力強い抱擁……歌麿の接吻……目をつぶらぬ接吻……抱擁
の遊戯……抱擁の次ぎに預期するもの……手の接吻……淫
蕩の奥庭……髮毛……グロテスクな變化粧……靜的な抱擁
……女からの抱擁……接吻と齒……愛撫の極致齒咬……^{パイパー}七つ
の接吻

匂ひの戀文庫……………119—150

匂ひのエロス……^{キッス}接吻は喚覺性感……惡愛の匂ひ……女は

匂ひの動物……藤村の嗅いだ女臭……體重三倍強の化粧品……臭鼻症のシヨセフィン……香水で國王を愛した娘……鳩の血にヴァシナル・ボマード……ハンケチの金盞花……晝の香りと宵の匂ひ……種草の匂ひ手袋……のこのの香……腋臭の誘惑……青春の匂ひ……茶人は淡白く玄人は濃厚……好みの香水……産毛を征伐する女……脱脂綿の悲哀……

喜になつたカザリン……………153—157

香りと匂ひ……………165—187

昔から有名な香水……四世紀も芳香を放つ珍香……野蠻人の嗅覺……烟草の匂ひ……香匂の取締令……香りに囚んだ遊戯……地勢と香りと匂ひ……晝と夜との花香……羅馬

時代の香り狂……蔷薇のブルガリヤ……性的分泌物の癖香……誘惑する香りと匂ひ……龍涎香……殺菌力をもつ花香……香りの魅惑性……性的嗅覺官能の胚胎……エロ的な香水の選定……生殖と性的分泌……文化と香匂……シルレルとボドレール……催×カクテール、抑制カクテール……白葡萄酒に香料……スープに混ぜてのむ……男だけが愛飲するシロップ……女だけが秘飲するシロップ……香料酒……船しいママレード……催×浴

「脱脂綿を語る」……………191—210

脱脂綿……小金溜めた「脱脂綿」女……女秘書ヘキ……十六歳にして情を解した……倫敦のウェスト・エンド……賣り子から圖書に……戦争が始まつてから……ピカアミー・サーカスの姉妹……民神室の自體露……浴槽の傳授……初夜……初會

の客

尖端的アメリカ風俗の調査 プロキール213—238

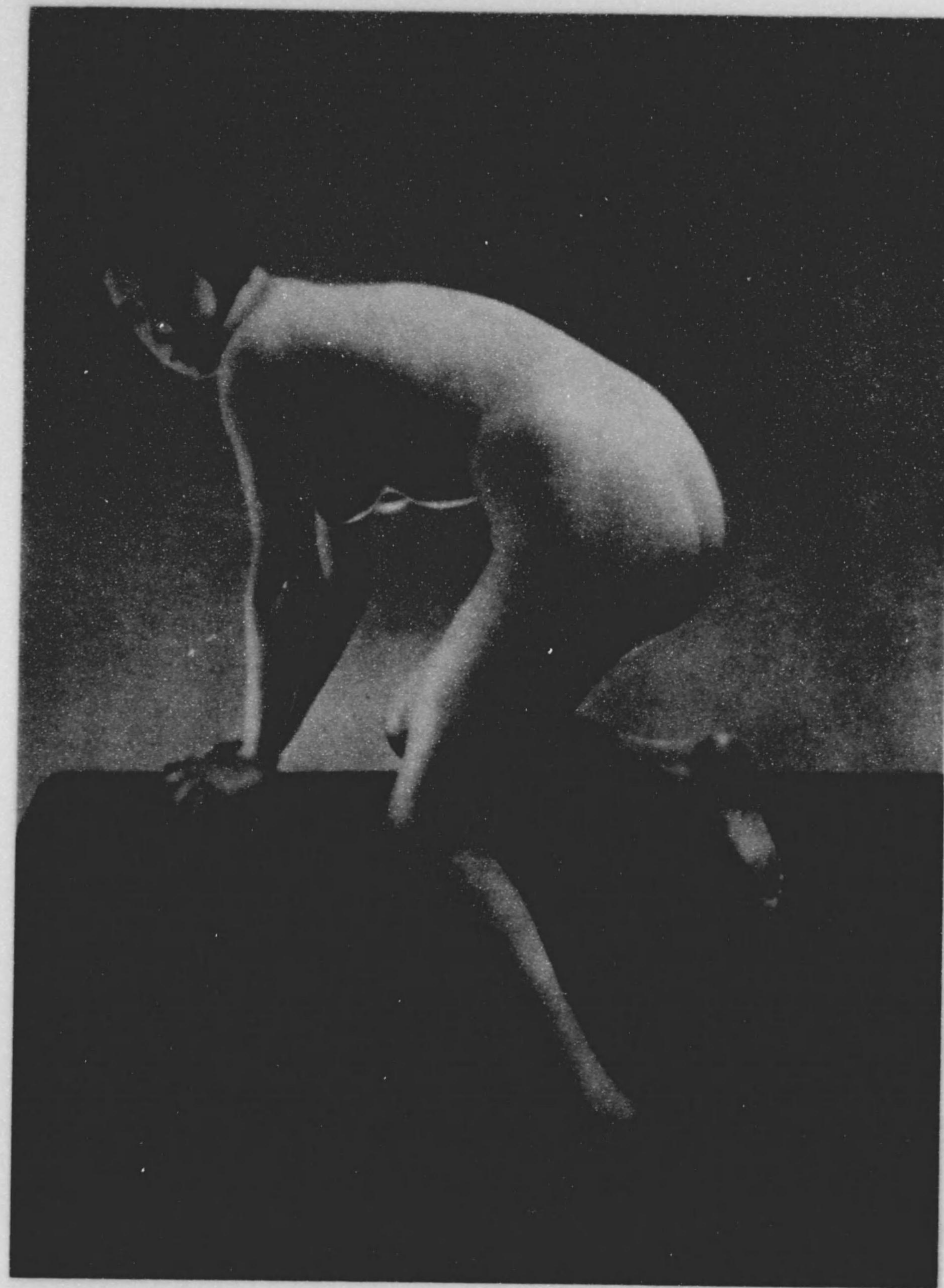
女難的風景……幻を追つて……機械力のつくる風俗……宵
の火事……ジキタ・スモウキング・マニア 胡 靴 下 狂……サアレンタイン・デー 情人心理……愛を囁く日……
エープリル・フール 四月馬鹿……ムーンシャイン 密醸酒……イースター 圓タテ・ガール……復活祭ダンス……
ベナー 笑ヒンと儂……アンニイ 夜勞した男

柏林情話241—251

カフェと酒場の調査255—270

徹底味のかけた銀座……女給受難時代……従軍のガイズ
ンがいゝ……女給群ゝ街の妖婦に代れゝ……レストラン
にみるべきものある銀座街……酒場の移動と暴徒……時
代錯誤の化物横行……カフェ・酒場とプロ階級……

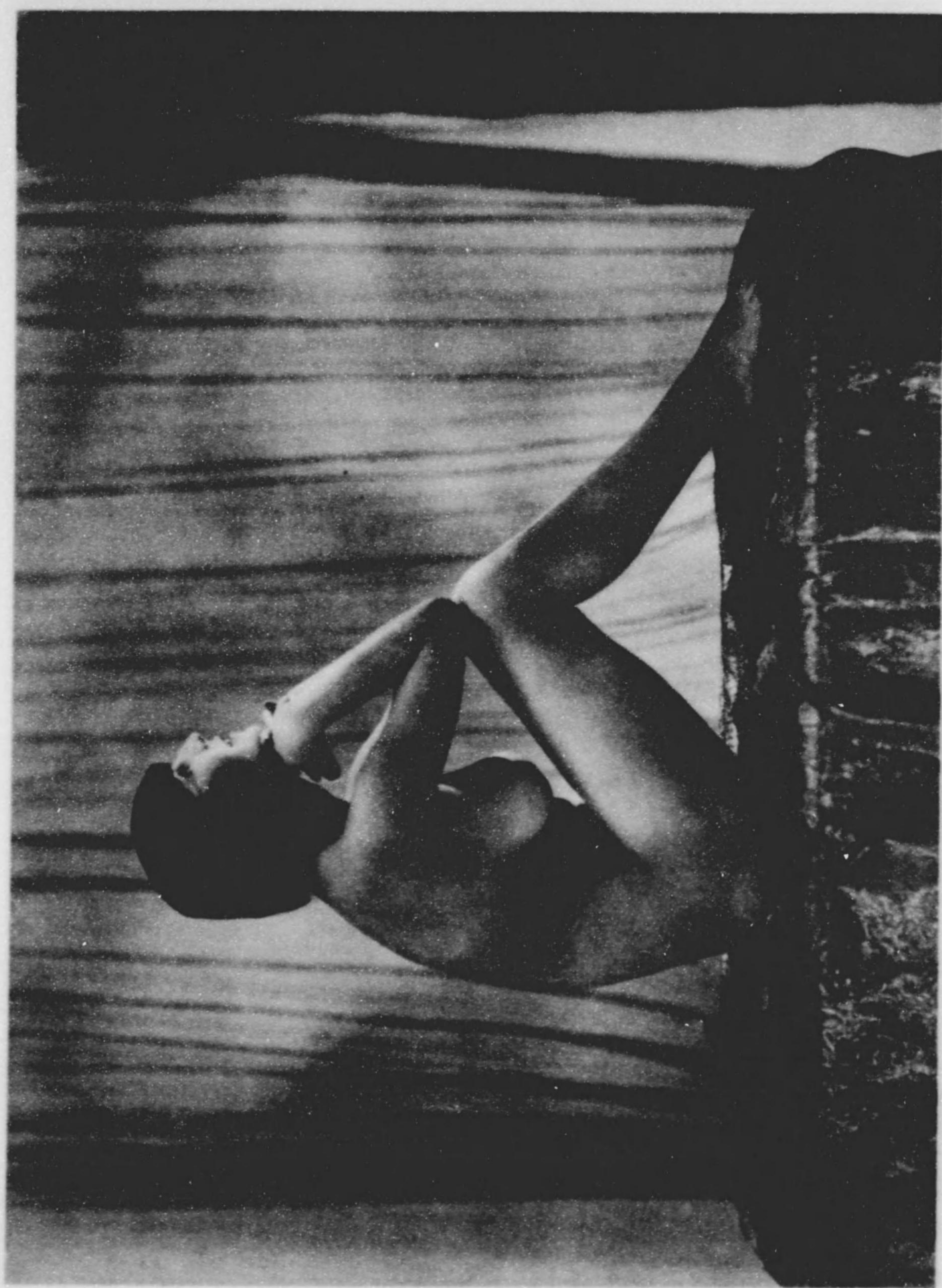












男は女を嗅ぐ

男は女を嗅ぐ

男は女を嗅ぐ……^{みいら}木伊乃は香漬……^{ペルシヤ}波斯人と番椒……好香
民族アラビヤ人……香水の起原……同様の群香……番椒の
香は情熱を喚ぶ……^{ボイフワ}あれもれ・紫羅蘭花……部屋に黄く香
花……肉桂と白檀……番椒香の神秘……玉體に香油を塗る
……ユダヤ人の香料資質……クレオパトラと香匂……甘松
香……食肉に香味をつけたヘアライ人……信仰上の香料

男は女を嗅ぐ

男と女とでは、女が男よりも、概して嗅覚神経が鈍いとされてゐる。
女が異性の臭いを嗅ぎわけるのは男よりも弱い。女の臭ひに對しては、男がよ
り強く嗅覚神経を働すのだ。異性臭を嗅ぐのに餘りに鋭敏でないばかりか、一
般に香匂に對する感覺力としても、男が女よりも鋭い嗅覺官能をもつてゐると
ミシ、ルスとかブロー、スなどの學者が主張してゐる。

この、男が女よりも鋭い嗅覺力をもつといふことが、女をして香りや
匂ひを化粧のうちに織り込ませてきたことになる。香り匂ひ臭氣に對して鋭敏
な男に對して、自然のうちに女が香水とか香料とかをよけいに嗜むやうになつ
てきたのだ。匂ひ袋とか化粧品とか、化粧料とかすべてが香匂を缺かないで、
それがまづ女の持物となつたのだ。

男は経験と訓練からして約二百種のちがつた香りと匂ひを嗅ぎわけられる
やうになる。女はいくら訓練してもだめだ。とくに、月經期にはいと、女の
嗅覺力の鋭敏がまづたく變化してくることが佛蘭西の學者の實驗から確められ
てゐる。

それにしてもいくら男でも誰でも彼でもみんながといふ譯ではない。二百
餘種の香りと匂ひとを嗅ぎわけるとはよほどの鼻が効くのでなければまづ難
しい。肥厚性鼻炎を鼻腔にもつてゐたり蓄膿症患者ぢやてんからだめだ。

香りと匂ひに對して鼻の効きかたが違つてくるのは、嗅覺粘膜の神経の組
織の相違からだ。嗅覺感應力の強弱は結局は粘膜の嗅覺神経の強弱による。

だが、人間は他の哺乳動物に比して著しく劣つてゐる。犬猫、禽鳥、昆蟲
の類は概ね哺乳動物よりも鋭敏なる嗅覺官能をもつてゐる。

獵犬のやうな鋭敏な嗅覺力がモボやモガにあつたり暗の妖婦達にそなはつてゐたら、きつと、戀人や情人の顔などは覺えまい。その代りに、鼻面ばかりびよこつかせることだらう。資生堂あたりの紅茶茶碗に。

「あらAさんの匂ひだわ。まだフレッシュだわ。きつとちかくにおゐてよ」と、モガの嗅覺的觸手はたちまちのランデブウへの觸感を興へるだらう。それに対して、

「ふん、この匂ひ昨宵の女の匂ひだ。まだこの邊ぶらついてゐやがるな。ぶつかつてはあな怖しや」

と、男は叫ぶ。けれど、獵犬が鼻面をびよこつかせて嗅ぎわけるのは、他の獸類の體から發散した揮發性臭氣である體臭を嗅ぐことができるからである。

「廁がいやに臭ふはね。きつと雨ですよ」

と、濡れ椽で手水鉢からの水に手を濡さず、空を仰いでの言葉だ。とくに入梅の頃。香り匂ひ臭氣、それぞれが寒暑や湿度の相違によつて嗅覺神經を刺戟する程度を異にしてゐる。降雨模様の濡り氣の大氣では、臭はないでもいらい廁までが臭ふ。

暑さの烈しい時期とか乾燥な大氣のなかでは、香りも匂ひも臭氣でも感ぜられる程度が低い。微靜な風、低温、適度の水蒸氣發散は香匂臭を強く刺戟させる。春宵幽暗の裡に梅香浮動すといふのはあながち詩人の想像のみではなかつた。自然の攝理による香匂の詩情だ。

雨後の薔薇の香。夕暮追つた頃の木犀の浮香。これらの爽やかなのも香分子が適當の大さになつてひろがってくるからである。

酷暑、炎天下の白晝、香水はあまり婦人の味方にはなつてゐない。いつか鎌倉の海濱ホテル下の砂濱で、真夏の海水浴衣に香水の匂ひを嗅いだことがあるが、なんのためか。今でもその女の顔が想ひ出される。

どんなに強烈な香匂でも香分子を零下二百七十三度に冷却するとまつたくの無臭だ。南極北極には、ただ氷の匂ひがあるのみだらう。

木伊乃は香漬

埃及人が古代民族のうちでもつとも香りと匂ひを好愛した。

ある意味で、埃及人は世界の香匂民族だといへる。三千年來、芳香と高匂を慕つてゐた民族であつた。それが現實的ばかりでなく夢幻的に香の境を求めてやまないのが古代埃及人であつた。

死んでも芳香に浸つてゐたいと希ふ。木伊乃は香料でつくつたやうなものである。屍を芳香ある植物性香脂で塗りかためて人屍の臭氣を防止したのが木伊乃となつた。木伊乃の目的が靈魂不滅の信仰から肉體を保存するといふことであつたかも知れないが、たしかに屍體の香料漬である。

木伊乃それ自體は木伊乃にするためには、桂香、楓子香、沒藥香などの植物性香料がふんだんにつかはれるのであつた。人屍の香料漬が木伊乃であるだけに、埃及人は香料の種別を多く有したのと利用法の進歩した古代民族であつた。食物の味覺にまで香料を利用した。毛髪用の香脂、香油、香精。皮膚にぬりこむ香料。香錠。燻香。食用の香料。藥味から清涼飲料用の香料。それぞれと香りと匂ひとを愛慕した。

埃及民族の武神アモンの神に戰勝祈願のための勸進文には香りと匂ひを捧げたことが記録されてゐる。三萬三千の牡牛を犠牲にして香氣ゆたかの聖草を捧げたといふのが、つい最近に發見された。彫刻されたもので、その遺跡はゆたかに古代埃及民族が香りと匂ひの好愛民族であつたことを示してゐる。

彼等にとつては香料は財寶中の財寶であつた。そして、金曜日は香りと匂

ひの日であつた。金曜日の食卓には味覚官能を刺激するよりも嗅覚官能に應ずる料理の品々が必ず調理されてゐた。鋭い匂ひの花が卓上にも床の上にも撒かれてゐた。現在でも、歐米のもつとも贅澤な招宴酒席にはきつと卓上を盛花と撒り花とで彩りをつけ、匂ひ高いものを特に悦んでゐるのも、二千年前の埃及人の趣味嗜好とまったく同じ人間の感情であるといはねばならぬ。

媚しい香匂の水浴。上流婦人の第一の贅澤な化粧であつた。唯だ女ばかりではなかつた。男も香匂の水浴をした。浴後には必ず奴隷をして香脂を全身にすりこませた。香の摩擦である。

煙香は纏々として香烟をたなびかせて性的刺激をもつてゐた。男女相愛の象徴は接吻でなくして香錠で匂ひづけた唇を嗅ぎあつたといふ。古代埃及人は接吻は香りと匂ひを嗅ぐことでその性愛的満足があつたに違ひない。

波斯人と薔薇

薔薇の香は古代波斯民族の民族的象徴だつた。

彼等は饗宴の卓に床に薔薇の花を撒きちらした。彼等は薔薇の花床に波斯絨毯の色彩以上の香りと匂ひとを求めてそれに耽溺した。

波斯の古代詩のもつとも麗しいといはれてゐるサデイの詩は「薔薇の花園」を讚美した。

麝香なのか龍涎香なのか

お前の香りと匂ひのなかに身も魂もうちとけてゆく

麝香でなければ龍涎香でなく

薔薇と連れ添ふたつちくれで

この香り、この匂ひ

との意味で、波斯人は一切の香匂を薔薇にまざるものなしとしてゐた。

高き香と明な匂ひを好愛した古代メデア人から傳統的に波斯人も馥郁たる香氣を愛することを遺傳されてゐた。

好香民族アラビヤ人

アラビヤ人は樹脂樹膠をわれわれの生活必需品のうちに発見した。

と同時に、現代的な香料を夙に発見してゐる。オリバナム、フランキンセンス——いづれも乳香だ——とか、没薬といふ熱帯地方産出の一種の樹脂で強烈な芳香をもつ植物性香料の素馨をひどく好愛した。

薬味と香料の商人はアラビヤ人のもつとも尊んだものだ。砂漠をわたつてくる大キャラバンの通路がユウフラタスの豁谷をすぎて地中海沿岸に通じてゐた。ユウフラタスの豁谷は香料と薬味とを砂漠の奥地から地中海へと輸出する唯一の道筋であつたが、大難路である。その難路を通じて香匂の慾望に対する人間の冒険好きから求められてゐた。

アラビヤ人は巧みに彼等の高價貴重な工製品の起原や製作法を陰蔽してその源泉を秘密にしておくことに苦心してゐた。かくて、アラビヤ人は肉桂はフィニクスといふ不死鳥の巢からでなくては採集することはできないとか、酒神バックスの生地にもつた蚊によつて守護されてゐる沼に肉桂があるんだとも信じてゐた。よびす草を採集しやうとすれば怖い棍棒がどことなく飛んできて眼をつぶすとかいつた風な迷信的な傳説をいかにもほんとのやうに觸れて廻つた民族だ。それは香料の採集にいろいろの危険や難澁をいひたて、かうした危険に身を曝らさねば護ることができないといふ理由からして香料を高價にしやうしやうと計畫してゐたのだ。

香水の起原

アラビヤ人は希臘人から化学を學んだ。それが九世紀から十二世紀へかけてアラビヤ化学として異常に發達してきた。

化学の發達はアラビヤ人をしてすぐれた醫術を育てさせてゐた。その醫術が傑出してゐたのはアラビヤ人から「醫者の王」とよばれたアッセンナをだしたことによつてもわかる。アッセンナは十世紀の輝ける存在であつた。

化学者ラーゼスそのひともアラビヤの輝ける明星であつた。ラーゼスはじめてミシ瘰癧と麻疹について化学的療法を述べた人である。ヤービル・イブン・ハンとかゲーベルとかの化学者や薬學者もその後アラビヤにあらはれた。ゲーベルの調剤法は今日猶ほ用ひられてゐる多くの薬品をすでに發見利用してゐたのだ。

アラビヤの化学は蒸溜法を發見した。蒸溜罐を使用して花からその香氣を採ることに成功した。花の香の揮發性の香油がその結果であつた。この創見は實に「醫者の王」アッセンナその人であつた。これこそ人間に香匂の生活が人為的に展開された劃時代的な線を描いたことだ。

アッセンナは蒸溜法によつて薔薇の花から香精をとつた。それはほどなく香高い花の香精を撒いて賓客を饗應する習慣をいまも猶ほもつてゐる東方諸國や歐羅巴へと傳はつた。これが香水の起原だ。

閨房の群香

ムハメッドは回教徒に香匂を愛することを獎勵した。

閨房の群香



印度密畫

回教の聖典コーランに誌されてゐる極樂の物語は「……この摩訶不可思議なる國土は、麝香とさふらんとを混じた純粹の小麥粉の塊である。その國土の石は眞珠とひやしんすとでかためられた。宮殿は黄金と白銀とで……」と形容された。その上に、そこには「……漆黒の腫もつ女神達は勇士達を群香漂ふ肩衣を波うたせながら女神の間房によろこび迎へるであらう」と。

この女神は純粹の麝香そのものゝ香精の化身だともかゝれてゐる。コーランには香匂を讚美咏嘆した文句がしばしば眼につく。

アラビヤ人の二つの寺院、タッリスにあるゾベイド寺とカラアメッドにある回教寺院は、その壁の漆喰には麝香が混じられてゐて、太陽がそれに照り輝くと壁からは恍惚たる群香が發散するといふ傳説がある。それはアラビヤ人の麝香に對する好愛心の發露だ。

アラビヤ人は調理にも香料を用ひた。「……小麥粉と胡麻油でこねて、小羊のやはらかい肉に胡椒、薑(はじかみ)、肉桂、乳萎、胡萎の種、みかんの種、小荳蔻(せうづく)等になつとめつぐを混じてから胡麻油で揚げる。揚げたものに麝香と薔薇の香精をふりかける。小羊の肉と鶏肉に小鳥の肉と小骨をぶつ切りにして焼き揚げる。そこで胡麻油をよく切つて、ひと乾きしたのを酸い青葡萄の果實汁にしなのきの實の絞り汁でさらつと揚げる。それを糖分で味つけて丸皿に盛りて麝香と沈香とを混じた薔薇香精液をふりかけたのを賞味する……」といふやうに、むやみと香料と刺戟料とを混じた調理がアラビヤ人の嗜好に投じてゐた。

薔薇の香は情熱を唆る

アラビヤ人はつねに情熱的な花と香とを愛した。とくに、薔薇が愛されて

ゐた。アラビアの國王のあるものは——サルタン・ムタウニ、ケルのことだが——薔薇を國王の獨占專賣の花としやうと決心したほどの薔薇マニアであつた。この狂的な國王の香匂のその嗜好癖に惱まされた。彼は宣言した。「我はサルタンなり。薔薇は香高き花の王なり。かるが故に、友として我等各々は配すべく他の何物よりも價あり」と。だから、彼の治世には領土内に於ては宮殿をのぞくどこにも薔薇を發見されなかつたと。國王は薔薇色の上衣をきて、絨毯に薔薇の香水を撒いた。

アラビア人は薔薇の花の保存に當つて蕾を土製の壺に入れ、蓋は粘土で密閉した。壺は土のなかに埋められる。ほしいときには、壺を掘りだし、いくらかの蕾をだしてからその蕾に水をふりかけて暫く空氣にあてゝ置く。するとやがて蕾はひらいた。

アラビアの都府カイロの街邑では、薔薇の花賣りはかう叫ぶ。「薔薇はもと荊薊であつたが、ムハメッドの汗がかゝつてそれは咲いた」と。

この薔薇の花うりの呼聲はムハメッドの奇蹟、「われ天上に導かれゆきしとき、いくばくのわが汗地上に墮ちそれよりして薔薇の花咲き誇りぬ。さればわが香りを知らんとするには薔薇にゆきてその香りを知れ」と傳へられてゐるからである。

白薔薇はメアラヂの夜のムハメッドの汗から創造された。

紅薔薇はムハメッドの侍従の汗から。黄薔薇はムハメッドがメッカからエルサレムへゆく折り昇天を豫感したといふその時ムハメッドののつてゐた獣のエル・ブーラクの汗から創造されたと傳へられてゐる。

ムハメッドが愛した花に指甲花がある。彼はヘナの花を以て、現世、來世を通じての香り高き花の女王と宣言した。

薫菜についても傳説がある。薫菜の香精は、真夏にひやゝかきで真冬にほ

のかに熱く、薫菜の香精を枕許におくは真夏に性慾を昂奮させ真冬に情を暖ると。性慾若返りの香精だ。

アラビア人は薫菜から清涼飲料水の精をその花瓣を砂糖漬としてつくつた。薫菜に匹敵するものは桃金娘である。といふのは、ムハメッドによると、「アダムは三つのものを持つて樂園から墜落した。その一は桃金娘。この世に於ける芳香ある花。その二は小麦の穂。この世に於ける食物の長。その三はかたきなつめじゆろ (date) の實。この世に於ける果物の長」といつてゐる。

あねもね・紫羅蘭花

サルタンのあるものは花としてあねもねを偏愛したのもゐた。

紫羅蘭花 (あらせいと) は、その香りがいゝといふのでアラビア人に好愛された花。あらせいとは三種あつた。黄は晝夜間断なく輝やかなしい香りをもつ。紫は太陽が没してからその匂ひを放つた。白は黄紫に比して匂ひこそ劣れ花が見事だつた。

なあしさを (水仙属) の香もすかれた。アラビアの諺に「麴麴を二つもつものはひとつをなあしさをの花ととり換へても損がない。その麴麴のひとつは捨てしめよ。麴麴は五體の糧。なあしさは魂の糧」といふ。

好香の民族アラビア人は麝香をひどく好んだ。鬚や髭に香をつけるためには麝猫香をつかつた。室内には龍涎香や沈香が香氣を満たすために香煙のなかで燻らされた。

部屋に焚く香花

東方の國、^{ペルシア}波斯と^{トルコ}土耳其では現今も猶ほ香木を燃やして部屋を^{かぐ}香ぐはす。金曜日の入浴後は芳香のある香水で體を淨めるといふ習慣がある。それらの香料を製造する獨占權が一時は回教のハ、イール——托鉢僧——に占有されてゐた時代もあつた。

その昔、アラビヤ人は彼等の體につける香脂を紅海沿岸に産出された美しい貝殻に貯へたものだ。香脂と麗しい貝殻。

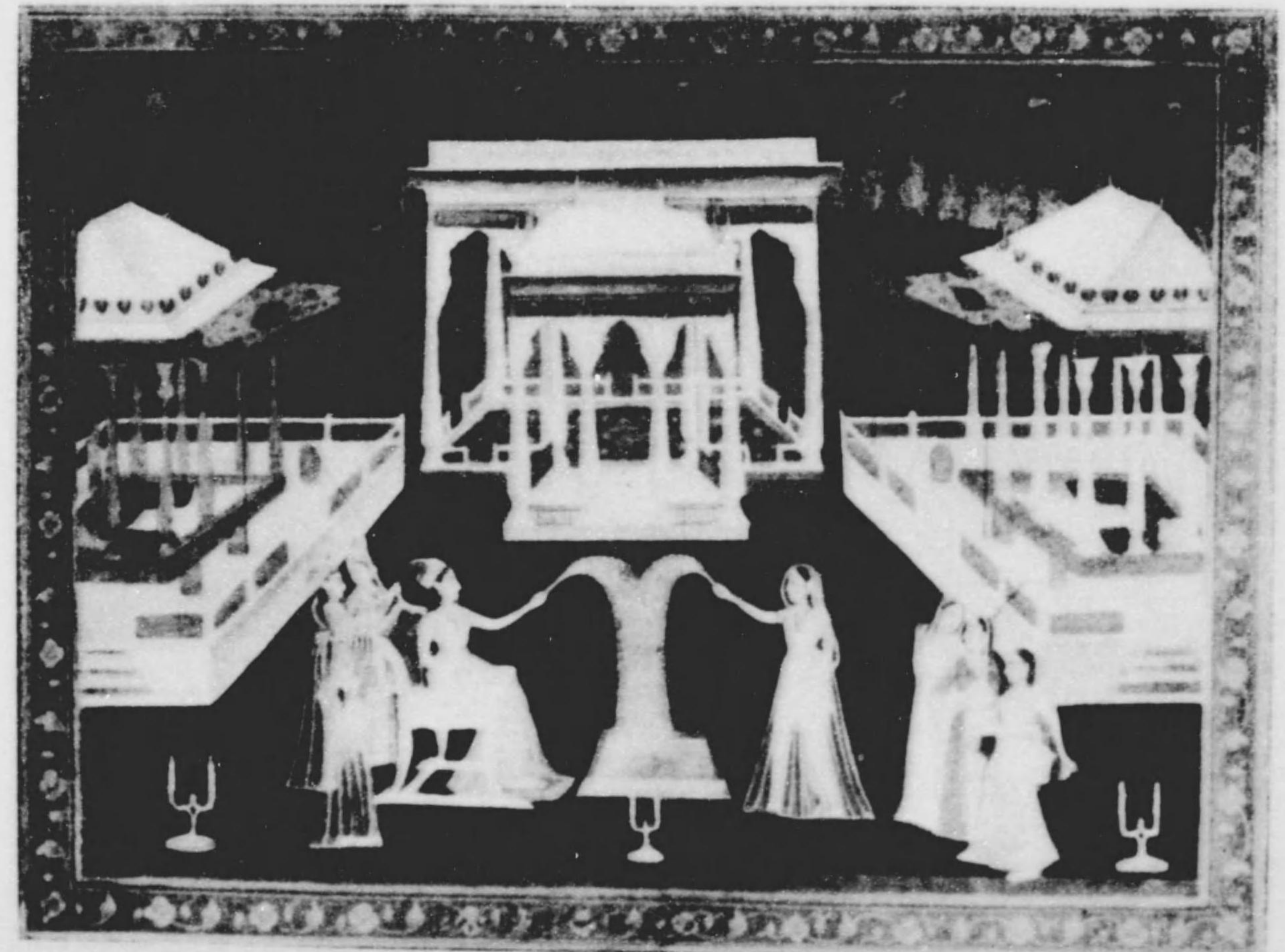
肉桂と白檀

印度人は西曆以前に香料をつかつてゐた。芳香あるゴムや香木を宗教的儀式にも酒宴のときにもつかつてゐた。

かしあ（肉桂の一種）やしなもん（肉桂の一種）の香精をよくむ灌木や草木の外に白檀のやうな香木を豊富に産出する印度では花の香よりも香木の匂ひが尊重されてゐた。それから高價な^{スライグナ}甘松香から抽出される^{バチウリ}ばちうり（印度産の香料の一種）や^{カハコ}ばれりあん（かのこ草）の種なども印度人の好む香油がとれるものとして彼等から珍重されてゐた。

白檀について最も古い^{メディック}メディックの史誌^{ニルクタ}ニルクタに述べられてゐる。それが書かれたのは紀元前五世紀よりも後ではないから古いものだ。そのことは第一世紀^{ペルシヤ}ペルシヤ灣のオマナに輸入された印度商品に關するところで示されてゐる。その純粹香油は九世紀頃王族の玉軀に香液を塗るために用ひられてゐた。ヒンズー族は彼等の聖殿を建造するのに白檀香油を壁に塗りこんだ。その聖殿の壁からは今日でも白檀香を發散してゐる。すくなくも一千年を超えてゐると傳へられてゐる^{ゾムナース}ゾムナースの門壁である。

^{スマトラ}安息香は香料としては廣汎に印度人が用ひたものである。スマトラとジヤ



バに産出する護謨樹から採集された。それはアラビヤ人にはジッパ・フランキンセンス（乳香の一種）として知られてゐたものと同一である。一三二五年にスマトラへ訪旅したイブン・バチタが彼の旅行記にフランキンセンスのことをかいてゐる。

ヒンズー族の信仰の特異な點では、白檀とかさふらんとかの香木香花を神前で焚くほかに神體を淨めるために信徒が香木を神に捧げたといふことである。

ヒンズー族の結婚式には妙なる香氣を放つ白檀の香油を撒き白檀を焚いて聖火とした。香木は葬式の時にも用ひられた。

薔薇香の神話

薔薇はさかんにカシミヤで栽培されてゐる。カシミヤの住民達は薔薇の花の採集と薔薇油の蒸溜には幾世紀もの訓練と熟練とを得た。

傳説によれば、薔薇油はデエハン・ギールの愛妻ノオルデエーハンビガム（世界の光）によつて発見されたのであつたと。彼女は或る日、そのなかを通ずる溝に薔薇水を流してある庭園を散歩してゐた。彼女は薔薇水の流れの表面に浮いた油のやうなものによつて気付いた。彼女は不思議な発見をしたかのやうにそれを掬ひとつた。彼女はあまりにも輝やかなしいよくよかな香油を知つた。それで彼女はこの薔薇水の上に浮んだ油性のものを採集してみやうと決心したのであつた。

玉體に香油を塗る

ヘブライ民族に依つて使用尊重された香料香水については『舊約全書』には隨處に示されてゐる。エツダス三十世の二十三年から二十四年間の一ケ年につくられた貴重な香油がある。それは没薬やいい肉桂やいいカラマスや桂皮オリッ油を混合したものであつた。香料の混合はヘブライ民族の特に好んだものだ。

この混成香油は、王族の閨房とか聖殿の捧火、祭壇の聖火、香を焚く祭壇、燭臺やあらゆる神聖な容器を塗るのに用ひられた。そのみか高僧の神獻の儀式に用ひて尊ばれた。ユダヤの王は代々その香油を皮膚に塗つた。尤も、ダビデ王の一族のみがその香油を塗る特権を有したといはれてゐる。

戴冠式の際に、國王に香油を塗るといふ習慣は、その後今日に於てもなほ行はれてゐる。

ユダヤ人の香料賣買

古代ユダヤ民族は、おもに香料や發香ゴムを賣買した。古代ユダヤの名家ギリイド一族はいろいろな香精香料をもつ灌木や植物を支配する家であつた。そこにはギリイドの香油と呼ばれた香液を生ずる植物が繁茂してゐて、それは創世紀の最初に、香料や、香液や、没薬をエジプトに運ぶ爲に駱駝でギリイドから來た彼の兄弟によつてヨセフの賣られたイスマイラ商人の箇所に書かれてある。

ギリイドー香油はアラビヤや、メデナ、メッカの近くに生育するバルサムオデンドロンのギリイデンスといふ樹木から獲られる香液である。この木を培ふことは非常に困難であつた。それなのに、十一世紀から十七世紀まで、カイロの近くのマトリヤの畠で美はしく栽培せられたといはれてゐる。

其當時、ギリイデンス香木を栽培する島は四圍に壘壁を廻らし、門衛に依つて守られたといふ程貴重な物であつた。採集された香油は王室の寶庫に貯藏せられた。

その香木も遂に、千六百十五年のナイルの氾濫によつて姿を没してしまつたと。

クレオパトラと香匂

發香性の香料及びゴムもまた主にユダヤの法律で定められて婦人の齊戒の際に用ひられた。

クレオパトラは異性を誘惑する爲に魅惑的な香料を用ひた最初の婦人ではない。ユデスは彼女をみる總べての人の眼を魅惑する爲に、貴重な軟膏で身體を塗り、美々しく體を飾つた。聖書中に引用されてゐる樟腦はヘナと同一物であることが解る。それは今なほ、頭髮や、腕や、爪を着色する爲に、主に東方の國々の婦人に依つて用ひられてゐる。

ソロモンは、肉桂や、甘松香や、蘆薈を含んでゐる印度の香料のことをソロモン大王のことばとしてのこしてゐる。それは其時代に於て極東と貿易のあつたといふことを語るものである。

彼はまたサフランや、カラマスや、乳香の木や、樟腦や、没薬をも引用してゐる。甘松香のことはソロモンの歌の中に數回、新約全書の中に二回述べられてゐる。先づ、最初の例として、聖徒マークが、非常に貴重な甘松香の軟膏の雪花石膏の箱を持つた婦人が、癩病患者シモンの家に來た事を記してゐる。第二の例として、聖徒ジョンがその時マリーが非常に高價な一ポンドの肉桂の軟膏を持つてゐたことを語つた。兩聖徒は共に、その價値が三百ペンスである

と述べてゐる。それは、現在の時價にすれば約十ポンドに相當するであらう。この香料が如何に有力であつたかは、その家が軟膏の香氣を以つて満されてゐたといふ記事で明瞭である。

甘 松 香

甘松香には數種類ある。その一つは最も美しい香を有し、最も高價なもので、ロイルはそれは細草屬のヒマラヤ植物の産であると證してゐる。そして、これは雪花石膏の瓶に入れてローマに輸入された薔薇油であると思はれる。それは非常に貴重で非常に高價な値を博した。甘松香の製法は、インドナアドや没薬や、香油や、カストスや、アモムウムや、その他數種の材料より出来てゐる。しかし、聖書にでてゐる純正なナアドは多分純粹な薔薇油であつたらう。當時、甘松香などの香料は縞瑪瑙一箱か大きな壺一箇に相當するといつてゐる。

食肉に香味をつけたヘブライ人

ヘブライ人は發香物を彼等の芳しい香氣として用ひたのみならず、その他數種の定まつた方法に使用してゐる。彼等は食卓の肉を香料を以つて香をつけ酒に香味をつけた。婦人達は香水として用ひ、その床や衣類をいぶした。死體を埋葬する際に使用された。

ヘブライ人による香の使途は彼等の歴史に於て最古の期間にさかのぼる。これが直接の神の命令であると傳へられてゐた。即ち、汝は香を焚く爲に祭壇を造り……、アアロンはその上で毎朝妙へなる香を焚くであらうと。僧侶達の習慣に依るならば彼の運命なるものは神の寺に入つた時に香を焚くといふ。

信仰上の香料

ユダヤの哲學者、マイモニズに依ればユダヤ人の信仰上の香の使途は、供へや、擽げられた動物を焼く時に起る嫌な香氣を防ぐことに源を發してゐた。

香は毎朝僧侶に依つて、神の祭壇の上で焚かれた。一握の香料が一年に一度最も神聖に、供へ物を焼く祭壇で燃えてゐる石炭の器のなかに高僧によつて焚かれた。葬式の時にも用ひられた。個人の家では稀に宗教上の儀式の際にのみ使用されてゐた。

乳房の藝術

乳房は人間の生命の源であり、愛の象徴である。古くから多くの芸術家が乳房の美しさを表現し、人々の心を打動してきた。その美しさは、自然の造り出した傑作であり、人間の身体の一部として、最も魅力的な部分の一つである。

乳房は藝術的象徴

乳房は人間の生命の源であり、愛の象徴である。古くから多くの芸術家が乳房の美しさを表現し、人々の心を打動してきた。その美しさは、自然の造り出した傑作であり、人間の身体の一部として、最も魅力的な部分の一つである。

遺女として描き出す
ること再三同。さ
れど乳房は依然と
して處女乳房のこ
とくである。
(MINT)

乳房は藝術的象徴……乳房の研究……乳房の正しい位置
……女のどんな姿勢できめるか……乳房の形態……階級性
を語る乳房……乳房と年齢……人種的にみた乳房……乳房
へ贅肉を……流行と乳房……乳房ないじめる女……乳房は
衣裳美の中心……





乳房の貨幣化

描ける乳房



描ける乳房





乳房の誘惑

乳房を誇る





乳房をうる女

誘惑する乳房

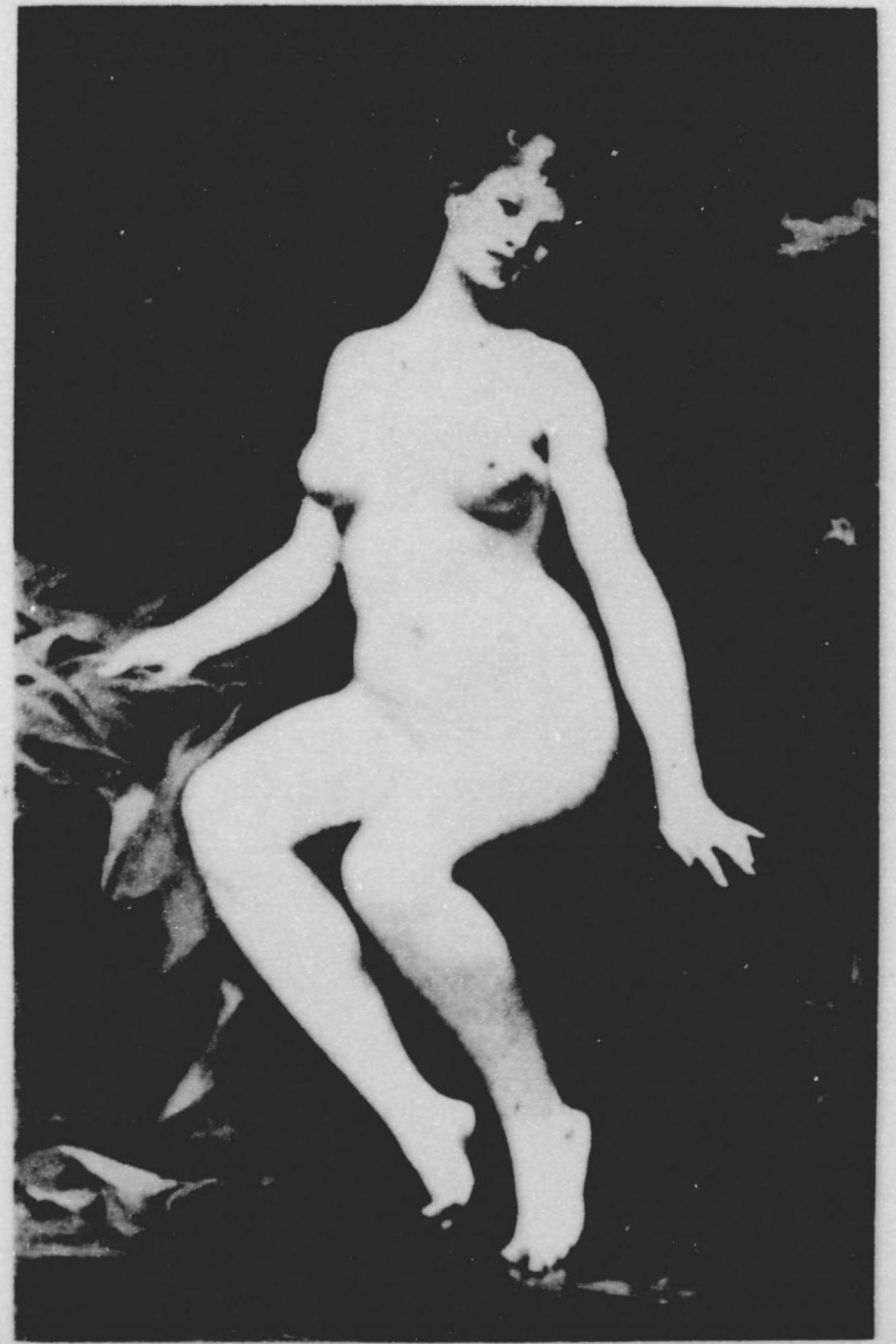




乳房に誇る

健康美の乳房





乳
房

乳房は藝術的象徴

乳房は女の××觸感機關としては、もつともすぐれた藝術的なものだ。

歐羅巴の藝術家は、古代希臘時代から現代に到るまで、どのくらい乳房を女の裸體美の象徴として扱つてきたかわからない。歐羅巴の藝術家は、女の裸體美を藝術化することは、一に露出された××や××を描出描寫するも、乳房そのものを性慾と肉感とに訴へる視覺的快樂の對象にしたといつてもよい。これは、露骨な性的場面を表現した古代羅馬時代に於ても乳房は技巧の限りが藝術的につくされてゐた。

乳房のない女を想像してみたまへ。そこに何が女の藝術的象徴としてのこるか。貧弱な乾涸びた乳房の女の胸を描いてみたまへ。空想でもそれは貧弱な空想だ。乳房を露出しない女の裸體美とは何んだ。それは醜惡な××ばかりが印象されるのみだ。乳房はみるだけでも、それが性愛の視覺的快樂を湧出する泉だ。觸感や××××はじめて知る乳房の性愛創造はやがて必然的に××への満足を追求めてくる。これが性的藝術の局部的快樂の第一歩だと知らねばならぬのである。眼に訴へて視覺官能を刺戟する女の乳房は、腰や臀や××よりももつと藝術化された女の裸體美からくる美しい視覺的性愛の快樂だといふべきだ。

だが、日本の風俗畫や猥畫で女の裸體美を藝術化したものがいくらかもあるが、それらが果して歐羅巴のそれらのやうに乳房を視覺的情愛の核心としてみたと同じ立場にあつたであらうか。われらのいふところの春畫とか猥畫は、概ねは乳房をよかくに秘してゐる。裸體であつても、乳房は決して描寫の焦點であつたとはいへないくらいに乳房の美やその藝術味は認められてはゐなかつた。

むしろ、乳房を顧ずして××××××を、誇大な視覚的情愛の快樂の重心に
あててゐたのである。それといふのも深窓の處女育ちとかやんごとなき姫御前
のほかは、われらの過去の女性はあまりに乳房を露出することが自由であり放
任的であつたからである。神祕に蔽はれてゐた乳房と、陽光に曝された乳房と
は、それをみるものに異なつた印象を與へた。われらの女性も男性も、乳房の
露出は×××××よりより鈍い感覺しか與へられてゐなかつたのである。

乳房の露出が、われわれの衣服ではかなり容易であり得た。また、露出
された乳房が、羞恥もなく人目に曝され過ぎた乳房があまりに隨處に隨時に味
ひ得たのであつた。男を知つた女が、授乳に半裸體で乳房の露出には性的羞恥
心を覺えさせられなかつた風俗が浸み^{ヒビ}滲んでゐたのだ。

乳房の感觸は、接吻と抱擁とも性に性愛技巧の一領域である。ふつきりと
張り切つた乳房のやはらかみ、なよなよした肌と肉とにつゝまれた乳房のぬく
みある感觸は接吻や抱擁でも感觸し難い解放的な性的許容がよくまれてゐる。
それといふのも、乳房そのものゝみがつ神祕性があるからである。ふつきり
と盛りあがつた、手頃の梨みだいの乳房からの視覚的快樂には、直感的にその
乳房の女が、薄紅の睡蓮の花びらを思はせる×××××××といふ聯想が浮
ぶからだ。男に女が肌を許すといふ感じは、女がその××の解放を許すことを
意味するよりもかへつて乳房への接觸と××とを許すことゝ理解しなければい
けない。さればこそ、乳房の視覚的型態と女の性愛技巧との聯想が、男を囚へ
てしまふ。乳房への男の永遠の興味はつきないのである。

乳房の露出は、女が無技巧に、女が無意識に、したものとしても、そこには
女の性的挑發が窺はれる。技巧として、意識をもつて、乳房の露出がなされ
るならば××××の露出されるよりも、より效果的だ。より情慾的だ。情熱的
だ。女がその××を羞しげに陰蔽し乍ら乳房だけをかへつて深く秘めてその片

影の露出をも許さないのは、乳房への接觸どころかその視覚的快樂さへも許容
しない深刻な性的闘争である。これこそ、乳房の感觸と男の情熱を知つた女の
態度だ。

娼婦とか淫婦には到底想像し難いが、慘酷な嬌態が時に教養ある婦人から
示される。いゝ教養と鋭い感情の純潔を知る理智ある女性に、浴みの時に、更衣
の時に、化粧の時に、××を大膽不敵な態度で露出したがるものがゐる。そ
れでゐていかにも羞しげにいかにも惜しげに乳房を隠蔽するのは、乳房の視覚
的快樂の尊さを知つてゐるからである。××を露出して乳房を隠蔽する。これ
こそ乳房の美を知る女の嬌態だ。ビエニル・ルウイの『妖婦クリシス』には「…
…君が乳房は銀の桶。その尖端は血に染みぬ」とかクリシスが入浴し乍ら乳房
を弄んでのことが深刻に描寫されてゐる。だのにルウイは女の××については
一言もしてゐないのはこの真理を掴んだのだ。この態度が歐羅巴の女の裸體美
の標準となつた。女の整齊な發育をした四肢と肉づきのいゝ軀の度かに乳房
を描くことを忘れなかつた。乳房の性愛的意義が理解されてゐたからである。

乳房は、男女の××の兩性愛情の昂進パラメーターとして扱はれた。歐羅
巴の女が、概して乳房を視覚的快樂に訴へたのも、それを××させたりするこ
とは印度や支那の女の比ではない。女が×××××××乳房の××を男に與
へるのは正しい性愛技巧である。娼婦とか賣淫婦や×××××ではまづあり得
ない。女が乳房の××を男に求めたりすることは、だから、男女の正しい情愛
の厚薄を計る性的標準である。また、乳房を男女の完全な××のための××行
爲として男が女のために××すべきものと考へたりする。これは、一に乳房の
××器官的觀察である。決して乳房の藝術的鑑賞への精進とはいへない。

Ananga-Ranga Kama Sutra.
印度の性典『アナンガ・ランガ』や『カマ・ストラ』には、乳房を××す
る秘戯を詳にかいてゐる。けれども、それは乳房を××器的鑑賞の對象にした

ものである。乳房の藝術的鑑賞の艶美文學ともいふべきものは、まだ寡聞にして知らない。たゞ、女の裸體美を興へられた繪畫や彫刻から鑑賞して、そこに湧く感興を乳房と結びつけて幻想するのみである。

乳房はあくまで視覺的快樂に訴へるものである。乳房を×××したり、乳房の××××の××などは、男そのものに何んも感ずるも興へない。男は女が××にさきだつて乳房を×××××征服感の一種に囚れるだけだ。

いかに乳房が露出されても、それは女の××の露出と同じ感情でみるべきではない。露出された乳房の視覺的快樂や接觸から男が××の衝動を感ずるがごときは性愛技巧の初歩である。乳房の露出にはあくまで藝術的鑑賞の心であつてほしい。××の露出からは妄想的快樂が齎されるのに對して乳房の露出からは純なる幻想でなければいけない。

乳房の研究

乳房が風俗史のなかで女の衣服衣裳のしやうばんお相伴で論及されたことはかなり多い。フックスなどもそれを扱つた。けれど、乳房が人種學的に研究されたことは餘りきかない。乳房が醫學的に研究されたことはあるだらうが、乳房が性愛技巧の對象から解放されて、女の裸體美の象徴として抱き締められたことも語られてゐない。

乳房の良否の標準はどこにあるか。張りきつた軟い乳房。それだけでいいか。肉づきのいい乳房。それだけで乳房の美か。大き過ぎない柔軟な乳房。それで満足されるのか。あまりに小さ過ぎない乳房。それでもつて現代人は乳房からの快感が映出されるのか。

張りきつた乳房。それだけでは漠としてゐる。しな委びれた乳房よりも肉づき





アリアのカ乳

のいゝ乳房がよい。それをいかにしてきめられるか。肉づきのいゝ乳房なら垂れさがつた儘の型でもよいのか。十五世紀の畫家ジャン・フ・ケの「聖母子の圖」は聖母マリアを描かずしてかへつてカール七世の情婦アグネス・ソレルの乳房を描いたのだ。ソレルの肉感的な乳房の美は裸體美よりも、マリアが聖母から肉愛の女にひきおろされた文藝復興期の人間味を描いた象徴として十五世紀以降すでに有名だつた。フ・ケの描いたソレルの乳房はまさにいゝ乳房だ。だが、どこがいゝか。ルネッサンスの繪畫が、女を扱へば殆んど乳房の美を描寫した。裸體美は即ち乳房美であつたことは、いふまでもない。「眠れるゼウス」のブッサンもフ・ケに劣らぬ乳房美を藝術化してゐる。

乳房が藝術的鑑賞の對象になるためには、そこには乳房が解剖學的にも研究されなければならぬ。考現學的にも人種學的にも土俗學的にも觀察されて乳房の美が那邊にあるかを決定すべきである。とくに、現代のやうに階級的に女の肉體美が差別されてくる時代には、女を女としてひとつの汎い範疇ひま カブツにいれてきめるのはよくない。階級的の乳房、女の生活環境からくる異常な肉體美の鑑賞は、やがて、女の性的生活をその基礎にもつからである。乳房の美はかくして單純なものではない。

乳房の正しい位置

女の肌の匂ひは、要するに、乳房の匂ひだ。乳房をとりまいて發汗する匂ひと乳房ちかくの腋の下あきの汗の匂ひは甘酸い。

胸に秘めた初戀の匂ひは乳房から揮發する。胸は戀愛の坩堝だ。腋の下は性愛を醸す蒸溜器だ。乳房は戀愛の坩堝と性愛の醸造器の成果だ。かくして、乳房は胸と腋の下とに水脈のやうにふかい聯絡をもたねばいけない。乳房の正

しく位するのは、正しい戀愛と純なる性愛とを生むことになる。

胸のどこにあるのが乳房として正しいか。胸のどの邊にあるのが乳房の藝術的鑑賞を昂めてゐるのか。乳房の正しい位置を定めるには、まづ肋骨を標準にするのだ。

乳房の正しい位置を肩から何時ぐらい下にとか、腋の下から幾時さがつてとかいふ。けれど、これは決して正確な標準にはならない。肩から何時とか、腋の下から幾時とかいふのは、胸の皮膚の弛みが脂肪の過少過剰でかなりに変化が齎されるからである。

胸の筋肉と脂肪は、いはゆる胸のふくらみは女にとつては顔の變化よりも異常に容易く生じてくるものである。

胸の筋肉も、胸の皮膚も、つねに生理的に變化させ得るのだからさきののべた肩から何時とか、腋の下から幾時では個人的にはわかつて、女への一般の標準とはならない。胸の筋肉と皮膚と脂肪とは、乳房の位置を眩惑させるにすぎないのである。眞實、乳房の正しい藝術的鑑賞への努力は、そんな曖昧なことでは承服し難い。メンゲの説くところでは、骨格的標準から乳房の正しい位置を決定する基準を風俗史的研究から示した。

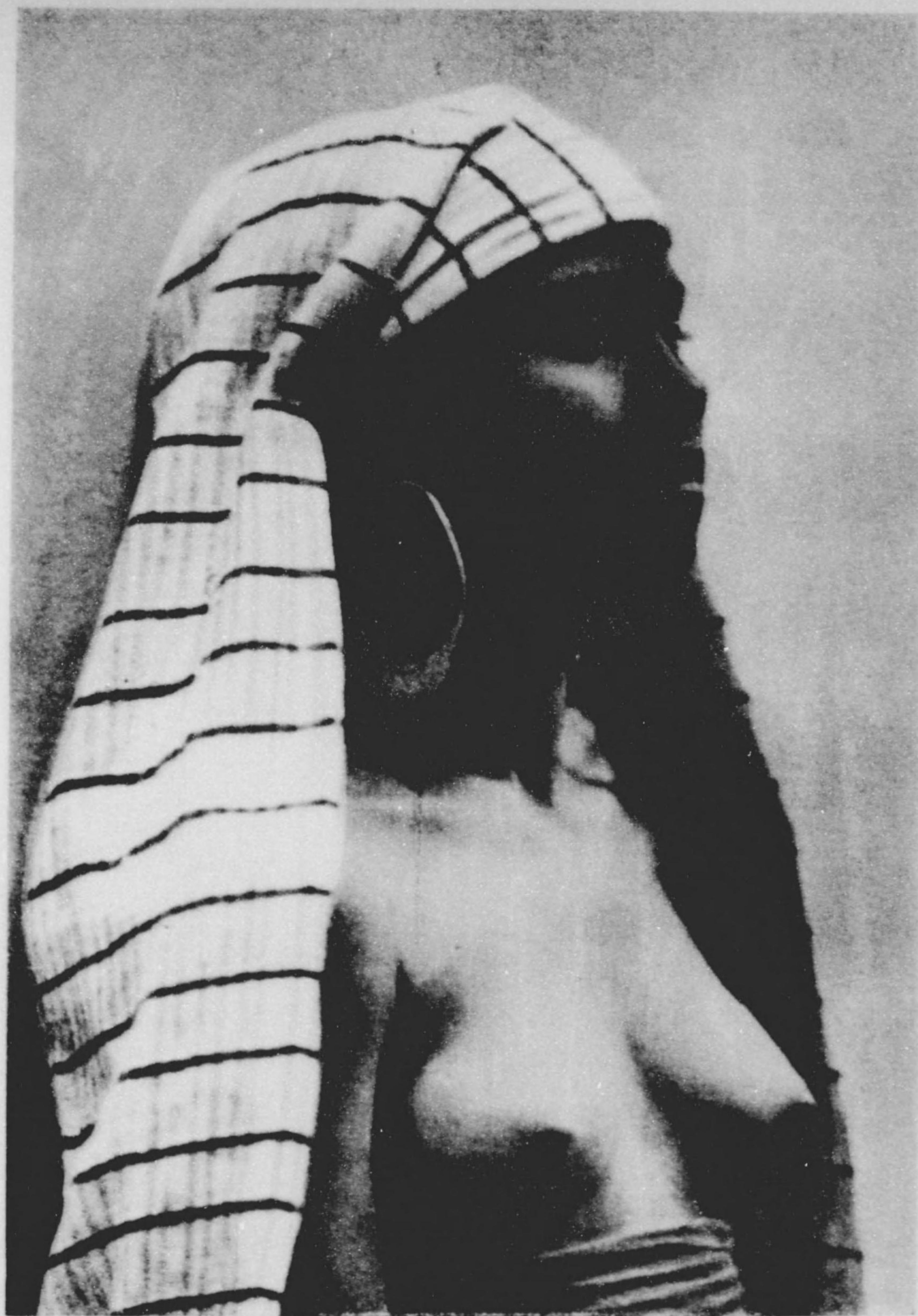
メンゲの所説では、移動變化する胸の脂肪や弛緩緊張する皮膚を乳房の藝術的鑑賞の決定には考量してゐない。骨格學や解剖學からの考察では肋骨を確固不動の尺度にした。

文化の高い生活をもつ人種や民族にあつては、第四の肋骨——肩から数へて——の横への延長線上に乳房があれば第一の要件は正しい。第四の肋骨の延長線上にあつても、それが極端に中央に偏したり、横腹へ片よつたりしてゐては駄目だ。未開人種とか半開人種では、それが第五の肋骨とか第六ならいゝが、第七の肋骨といふ所に近い肋骨の延長線上にあるものがある。野蠻人の女の乳



ハーレムの乳房

極端に二段になつた乳房と乳首との典型



尖りたる乳房 (エジプト)

房は殆んど第七の肋骨の延長線上にある。文明文化の高いほど肋骨の上位の方へと乳房の位置も上昇してゐるのである。

乳房の位置の低下は即ち文化の低下である。文化の進んでゐるのが乳房を上昇させてゐるなんて文化と乳房との因果関係がありさうだ。

文化の程度が高ければ高いほど、乳房の位置が上昇してゐるといふのも相對的のことゝしても、白種人は有色人種に對しては必ず上昇してゐる乳房を示してゐる。白種人は第四の肋骨と第六の肋骨の間にあるのが乳房の平均的な位置である。

ひと眼みて、女の乳房が^{あご}頤頤から遠ざかつてむしろ^{おし}臍により親しい距離にあると感じるのは未開的であるとせねばならぬ。

それに反して、腹部から遠ざかつて^{あご}頤頤に近ければ近いほど文化的な乳房の位置だとしてよいのだ。

女のどんな姿勢できめるか

文化人の乳房が、第四の肋骨の横への延長線上だといつた。けれど、その第四の肋骨の横への延長線上に乳房があるかないかは、女がどんな姿勢である場合に限るか。これが問題だ。

^{あご}兩腕を高きさしあげれば胸筋の弛緩したかなり低下した乳房でも上昇する。第五や第六の肋骨の延長線上にある乳房でもかなり上昇した位置を保つ。兩腕を腰へかければ乳房もさがる。そこで、乳房の位置を定める女の姿勢の第一の要件は、兩腕を背後に廻して、しかも、腰からかなり上位で兩腕を脊骨を中心にして組んで、左の掌で右腕の肘を軽くをさへ、右の掌で左腕の肘を軽くをさへる。かくした姿勢の場合に、乳房が第四と第六との肋骨の間に位置

するのが、文化高き人種や民族の女の乳房の正しい位置となるのである。

もし、右腕を高くさしあげると、右の乳房だけが上昂してしまふ。もし、両腕を顔面の鼻の處で押へるやうに合掌し、両腕を肩に平行して上で両腕を張れば、乳房は胸の中央に傾集するのであるから、正しい乳房の位置は定め難いことになつてしまふ。これらの條件は避けてさきにのべた通りの姿勢を保つのだ。

いくら乳房が第四の肋骨の横への延長線上に位しても、それが極端に中央部とか両端へかけ離れてゐてはいけない。

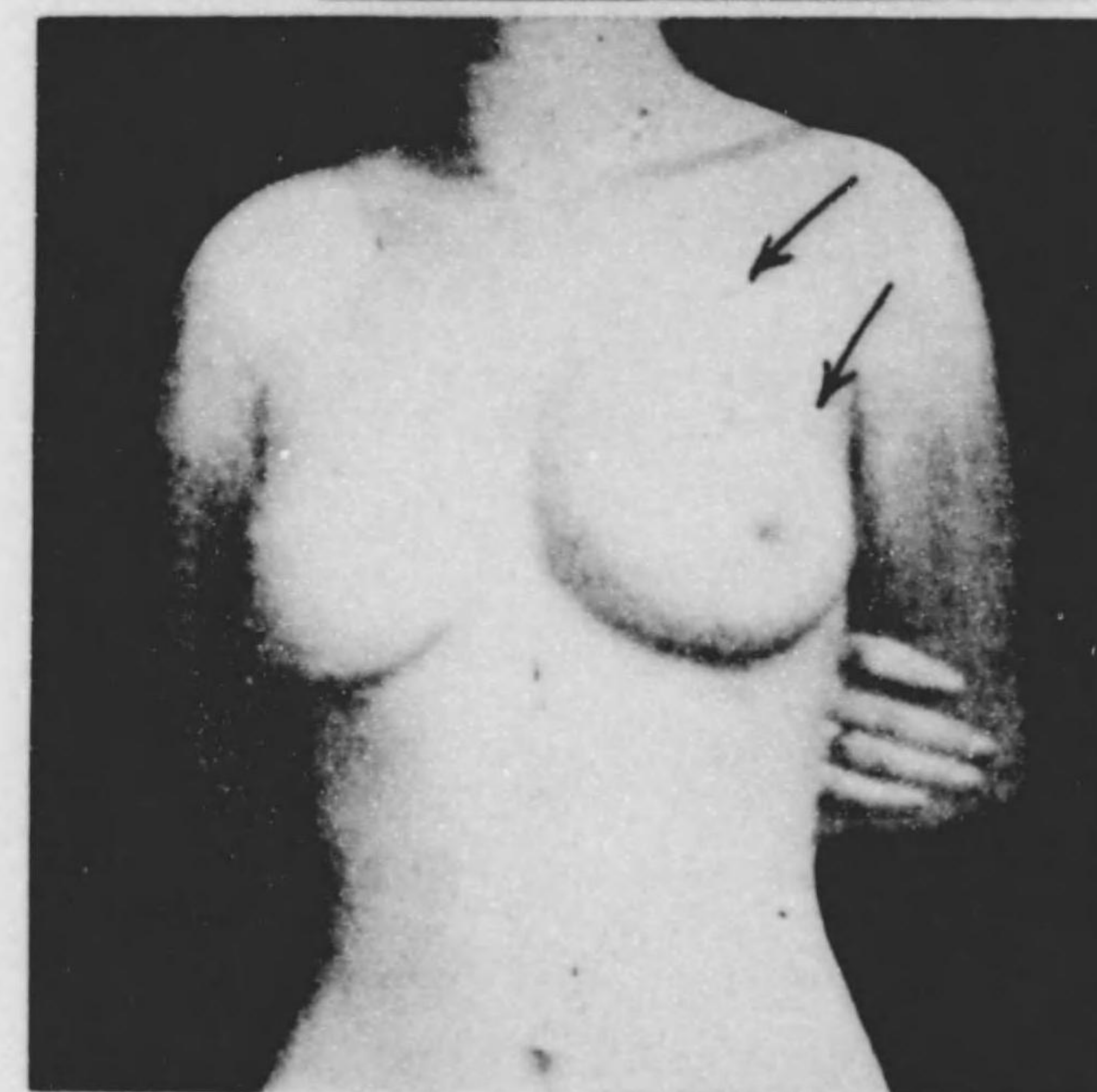
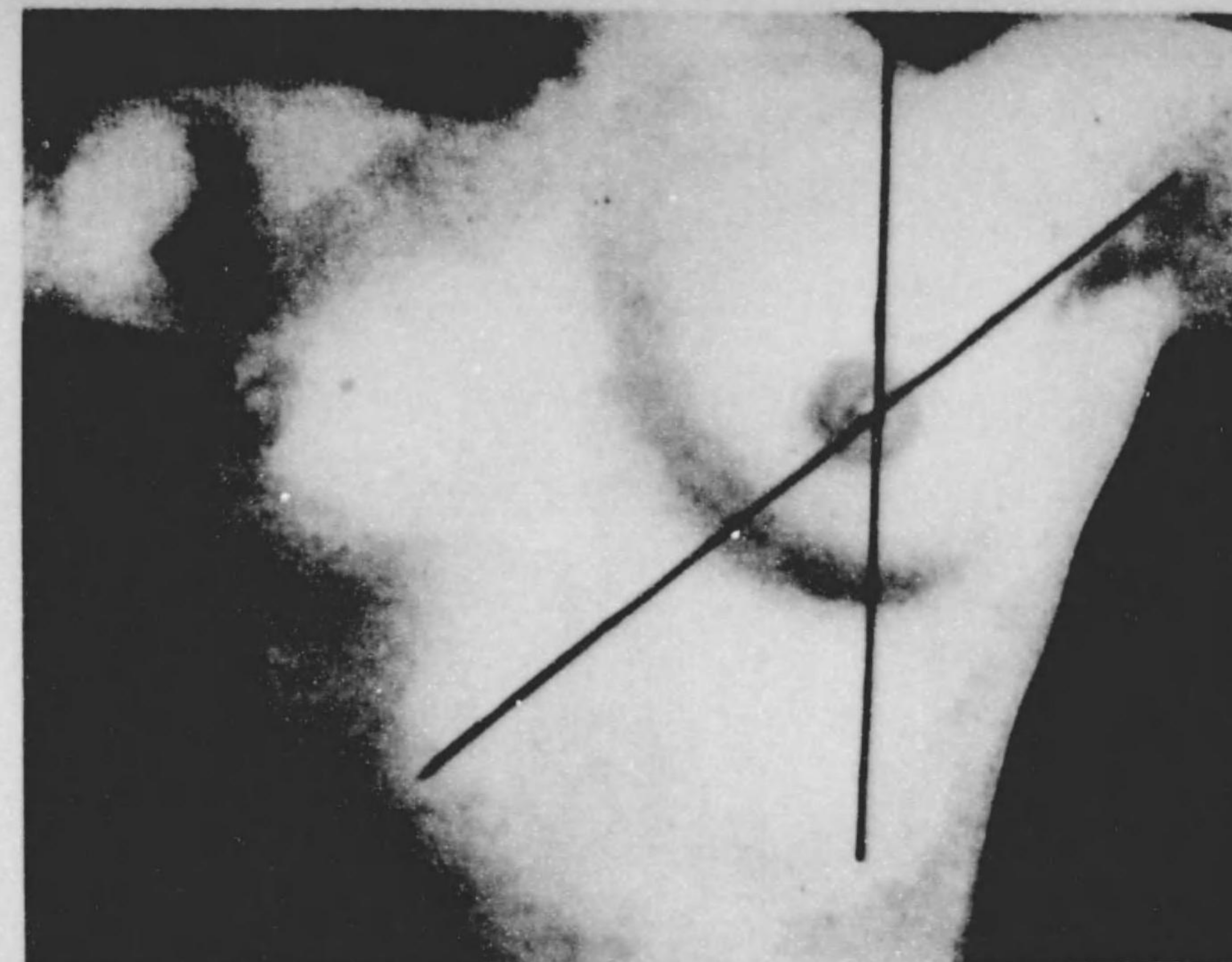
乳房が左右へ距り過ぎてもよくない。中央により過ぎてもよくない。その間隔が整齊な美の啓示を保つ位置におかれてゐなければいけないのだ。それを視覚や直覺できめると錯覺に囚れてしまふ。

さきに述べた姿勢でもつて、腋の直下から第五の肋骨とを結ぶ直線を定めると同時に肩胛骨の中央部から胸骨に平行して垂直線を引く。この垂直線と腋の下と第五の肋骨とを結んだ直線とが交錯する點に乳首が位すれば、乳房は左右的位置にも正しく美しい地位に君臨してゐるのである。この正しい左右的の位置と、さきに述べた正しい上下的位置の二つが許される乳房が裸體美の啓示である。幻覺による乳房の美や錯覺的な乳房の君臨を斥けねばならぬ。けれど、これだけではまだ藝術的鑑賞の對象としては完全な乳房ではないのだ。

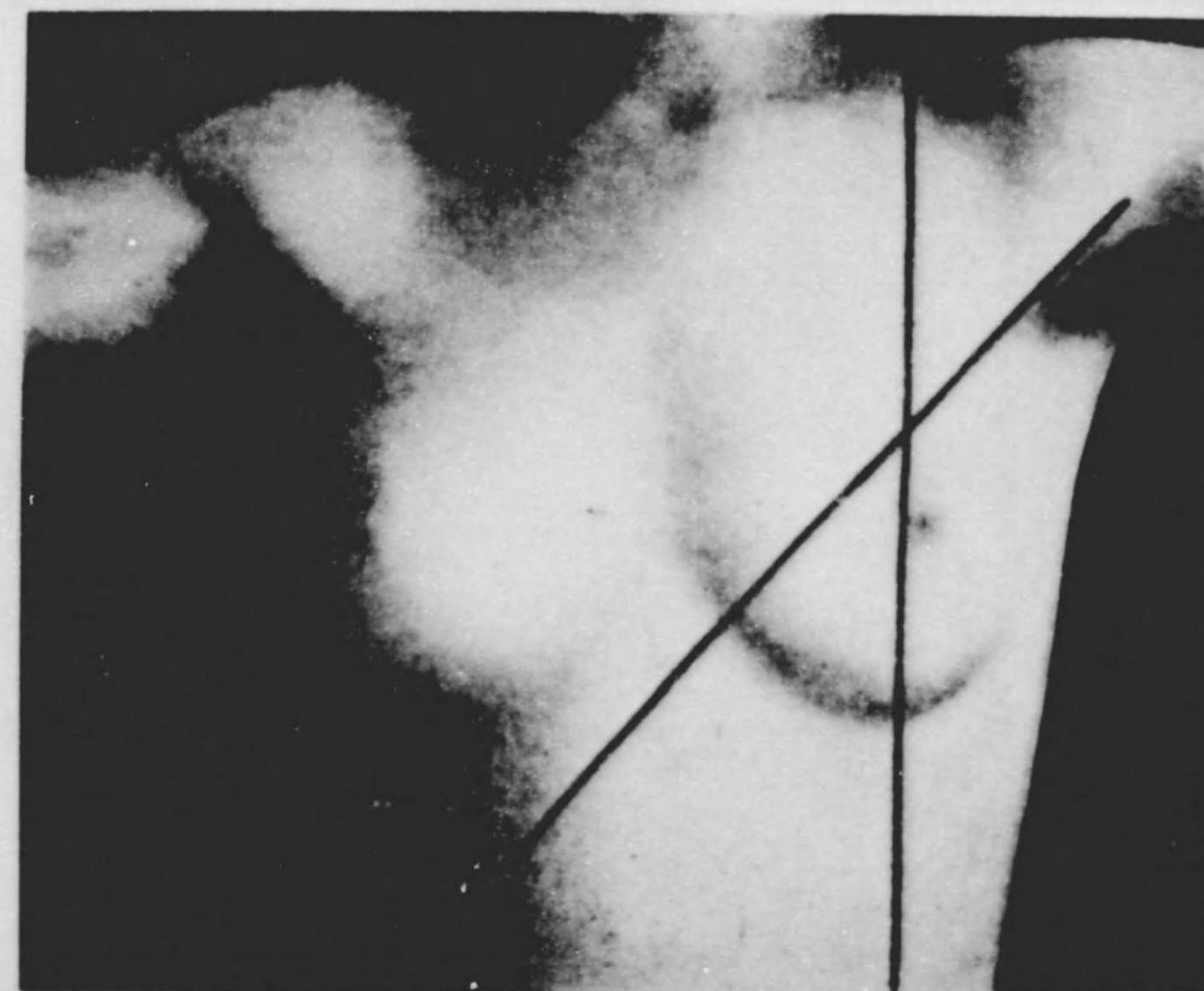
乳房の型態

よくよかな乳房。燃ゆる熱情をしのばせた乳房。潤ひある天使の乳房。蔷薇色の乳房。舐められるを待つ乳房。煮えたぎる胸の戀を語る乳房。純貞な乳房。どれもみな乳房嬌態や優しさや艶麗な風情をもつ。されど、秘められた神

乳房の正しい位置



正しからざる位置にある乳房



からの乳房の美は嬌態や優しさや艶麗な風情だけでは表面的には決定されないのだ。

科学的に艶麗な乳房は、女を抱擁したときにはびつたりと男の胸にはまり込む乳房でなければいけない。フェウストが初戀の女だとばかりにのぼせあがつたマルガレテに語つた。

「落ちついてお前と一しよになつて、胸と胸と、心と心と通ふやうには出来ないものか」

と歎つたのは、胸と胸と心と心と通ふマルガレテの乳房が柘榴のごとく堅くてはよくない。泥に塗れたボールのやうに乾燥な乳房では戀は語れない。春の目覺めを乳房から幻想される乳房は、おしやれものであつてほしい。

光明を射された乳房は淡紅の薄す臙脂の腫をもつ乳房であつてほしい。

いゝ乳房がいゝ位置におかれても、圓錐型であつてはその女は×××にはすでに過去のものだ。男を知る古狐だ。乳房の型態には圓型と半球型と圓錐型の三つがある。このことは、勿論男を知らぬ處女の乳房についていふのだ。

乳房を××××××××××、×××すれば、いかによい恰好の乳房でも變化がくる。妊娠した女の乳房は、概して、垂れさがつて半球型から圓錐型になつてくる。授乳した女の乳房はもう性愛の過去を告げてゐる。乳房の藝術味などは捨てたものだ。乳房の藝術的鑑賞の立場からいへば圓型がもつともいい。半球型と圓錐型はそれに亞ぐ。

現代の女が、ともすれば、産兒制限をやりたがる。有閑階級の女が、出産しても、授乳を嫌惡するのは美貌の減退を愁ふばかりか乳房が圓錐型になるのを嫌惡して乳母に托してしまふ。圓型は現代好みの乳房である。處女の誇りである。處女の榮光である。圓型から半球型への變化は性慾の頂上へと歩む女の胸の動きである。分娩は乳房美の破壊であり革命だ。分娩した女の乳房の色、

乳首のぬくみには、性慾の囁きが湧く。

けれど、ある時代の性愛的雰囲気はとくに圓錐型を好んだこともある。ある人種では半球型よりも圓型よりも圓錐型をとくに「男を知る女」として巧な性愛技巧をもつ型態として尊んでゐる。アフリカの野蠻人の女が離乳した後に乳房が典型的な圓錐型になつた極端なのがある。挿入した寫眞がそれだ。

現代のやうに女の衣服衣裳が、ますます薄ものに傾いてゆくのを以て女性美とする時代では圓錐型も半球型も決して讃嘆されてゐないのである。乳^ニ抑へてコルセット以上に乳房を押へつける。晒木綿をぐるぐると捲きつけて乳房をぎうぎうと締めたり括^{おし}搾ける。乳房は決して優遇されてはいない——その性的興味^{セクシュアル}が優遇されてゐるのに反して——。

裸體で女が生活する人種は、乳房は生理的にものびのびと蘇^{よみがへ}つてゐる。野蠻人の女の乳房がふさふさしたのがそれだ。纖弱い處女の乳房は房々しい感じはないのだ。ふつくりともれあがつた乳房こそ圓型。處女の花だ。その花の心にはかすかな肉凝結がある。圓錐型は野性的だといひたい。

艶^{つや}のない手の持主は潤れた乳房。それは圓錐型でなくとも半球型でも圓型でも喪服つけた乳房である。××××××××××てゐる。髻^{かむい}は骨張つてゐる。性愛的には過去の女だ。

東洋の女は、西洋の女子に比しては、概して、圓型よりも半球型か圓錐型の乳房をもつ。戀人情人の乳房をひそかに觸^ふつてみるがよい。

階級性を語る乳房

乳房そのものにも階級的影響が窺はれる。もつとも乳房の階級的影響は、決して、乳房の人種的差異ほどに骨格的標準などによつて決定されるものでは

乳房の魅力



圓錐型乳房の最もよき典型

ない。それよりも、乳房は女の生活環境や職業によつて、かなりはその外型を異にしてくるのである。

ブルジョア階級の女は、かへつて、乳房が素直に艶笑的でない。胸筋の發達しない有閑階級の、結核質や腺病質の體質をもつ女の乳房は勿論いゝ筈がない。運動不足で、荒淫で、睡眠不足の社交婦人の乳房がかへつて醜惡なものが多い。××××××××、たゞ徒らに耽愛生活に陥つてゐては、いかに處女の乳房でもいゝ發達どころか型すらも求められない。有閑階級の處女で、潑瀾たるスポーツ・ガールであり、ダンサーとして躍々たるもの、乗馬を好み、アルビュストであり、スキーマーであり、スケーターであるがごときものゝ乳房は、見事な完成の域へと進んでゐる。ブル階級のいはゆる貴婦人達のやうなものは徒らに懶惰なる乳房を抱いてゐるのみだ。

もし、ブル階級の女で、すでに、分娩したり授乳した経験がありながらも、男がひと眼みて恍惚とする乳房をもつてゐたら、それは人爲的に乳房の美を保つてゐる結果だと知れ。乳^{ビュフアンヘルツ}抑^{くらびやか}へがきつと絢爛な衣裳の下に鎮座してゐるのだ。

乳抑へはだぶついてゐては惡癖をつくる。堅すぎてもよくない。間隙も餘分もないきつちりとしたものを、すこし上部に吊りあげ氣味で常用しなければならぬ。弛みや緩ましたビュフアンヘルツの使用は寧ろ乳房を醜惡にしないとも限らない。

いはゆる圓型とか半球型で、弛みも緩みも片鱗すらもみせないくつきりした乳房は、古代希臘の處女の乳房である。ブル階級のスポーティな娘達は、この現代の時代的熱病であるスポーツの影響をうけて、すくなくも、半球型以上のいゝ型になつてゐる。現代のブル階級の女で男を知つてゐる女は懶惰なる乳房だ。處女こそ古代希臘型の乳房に秘めてゐる。竊視するには羞恥を敏感する

この古代希臘型の處女の乳房が享樂的だし藝術的鑑賞の對象となる。

職業婦人についてはダンサーとかレビューの合唱女は乳房と脚線美が生命だけにいゝ乳房をもつべく努力してゐる。紐育の上 街百二十五丁目あたりの淫猥な寄席で、合唱女が舞臺から降りて椅子席の通路を惡どく淫戯しながらちらりとみせた古代希臘型の乳房。今にも幻に浮ぶ。

職業婦人は乳房をいつまでも處女らしくみせたい。××はすでに××してゐても乳房だけは處女らしくと秘術と犠牲とを拂ふ。アルコールで朝夕軽く摩擦してもむはその簡便な方法のひとつ。授乳は乳房美の惡質だ。睡眠不足は乳房よりも胸の筋肉を減退させる阿片だ。

職業婦人でもタイピストとか女工とか百貨店の賣子になると、彼女達は乳房の美をいかにして保つべきかを苦心しない。それだけに平凡な乳房である。だが、彼女いまだ處女と公然名乗りつゝ乳房と乳首が××××××の神秘さは詐り得ない。女工だからして醜惡だとはいへない。労働による筋肉の發達がよい影響を與へてゐる場合も發見されるが概してよくない。

獨逸の烟草工場の女工は大部分が型を崩した乳房だといはれる。弛んでゐる。烟草のニコチンが工場のたちこめた空氣に混じてゐるので女工達のホルモン分泌腺を侵して分泌腺を麻痺させてしまふ。ホルモン分泌は乳房を刺戟し乳房に營養を與へる唯一の生理機關なのだ。それがニコチンで麻痺しては乳房は衰退して、處女にして處女らしくない小皺のあるものとしてしまふ。處女で乳房が老衰期にはいつてゐるのだ。裁縫女やその外つねに胸部を壓迫してゐる職業婦人は乳房は外部の方へと偏在してゐる傾向がある。

乳房と年齢

乳房の年齢的變化ははつきりと示されてゐる。原則としては四五歳迄はまつたく偏平である。拾歳から拾二歳まで乳首がやゝ突起してくる。拾三四歳になると乳房がなんとなしにむづ痒くかきたい感じがする。そろそろ人のゐない處で袖から手をいれたりして乳房を乳首を無意識に弄ぶことに軽い快感を覚えてくる。春の目ざめの魁だ。かくして××を知る。

乳房や乳首を無意識的に刺戟したり、それに快感を覚えてたりする。女の本能である。女の快感である。觸られてもこそばゆい感じがいつかは快い秘密の快樂となる。自ら獨りで乳くりあふのは女になつてゆく象徴である。

拾六七歳から處女の乳房は青春期の花となる。拾七八歳から二十七八歳が乳房の××頂上である。それからは爛熟期へといそぐ。やがては乾からびた凋落期への段階である。

人種的にみた乳房

乳房の美は文化向上と正比例して認められる。文化の低い人種は乳房の美を視覺的には激しく需めない。

女の裸體美の焦點が乳房にあることは文化の高いことを意味する。古代希臘では女の乳房は發達した四肢とともに女性美の象徴であつた。古代羅馬では乳房は女性美から進んで性愛の對象になつた。文藝復興期では女性の解放が乳房にあらはれた。歐羅巴の女は、主として圓型だが、例外として南歐の羅典系の女は半球型になつてゐる。これは、羅馬民族が乳房性愛技巧を好んだことが遺傳的になつてゐる現象だともみられる。猶太人の處女はいゝ乳房だ。スライズされた林檎の一片。妊娠してからはだぶだぶと鳩胸にぶるさがつて猶太人の氣質のやうに貪慾のシンボルだ。

東方の國々の女は、アフリカでも、ベルシャでも、印度でも、圓型よりも半球型か圓錐型に傾く。支那の女には圓型も半球型も圓錐型もあつて一様ではない。日本人については知るところすくなきを遺憾とする。

アフリカのナイル河畔のバルベル種族は人種としては東洋人種だ。その處女の乳房は妖艶な圓型乳房である。褐色をした皮膚がはりきつた胸筋をついでそこに^{こきり}的礫としてひかる乳房。つねには處女の乳房を神祕なものとし決して露出しない。種族を守護する神祭典の時には羞しげもなく左の乳房を露出する。祭典は夕刻からで宵祭の舞蹈に處女が神祕にひかる乳首を輝せて男にこれみよがしに胸を張る。左の乳房を露出することは甘き戀を呼びよせる囁きを意味する。左右ともに露出するのは處女がやがて女となるその××××にのみ限られてゐるのである。

熱帯地方の未開人の女は、乳房ばかりか軀を露出する。肉體美の解放である。氣候と温度とが關係する。衣服も腰と頭につけるものゝみだ。開放的な衣服は自づと乳房を大きくするのだ。藝と美と媚と肉とをうる女が、晒木綿を一反も胸から胴へぐるぐると堅く巻いて肌の不整齊を補ふことは熱帯の女には耐へられない苦痛である。

アフリカの奥地に蟠居する種族の女は女らしさが軀に現れてくる頃から^{バウフツンツエリン}腹踊をやる。軀に一条も纏はずに全部露出して^{へそ}臍を中心に腹部の筋肉を自由に躍動させ腰をよらつかせて見事に猥褻な踊をみせる。

この腹踊は腰のリズムと乳房のリズムの交響樂を伴奏にして始まる。広い意味で、これは^{バウフツンツエリン}腹踊であるが一部一部では乳房踊であり尻踊である。彼女達は乳房は大きいほどがよい。乳房は垂れさがつて葡萄の房の如くであつてこそニグロの男は垂涎^あく能^うずだ。古代希臘は現代の歐羅巴の女が抱いた乳房美とは格段の距離が生じてゐるのだ。挿入した寫眞はやゝ不鮮明だがアフリカの

文明人と未開人の乳房
に果して差異があるか



(右圖はアフリカのバルベル種族の花嫁姿。乳房露出で、結婚式に臨む)

野蠻人の女がパウファンツェリンをやつてゐる時の右の乳房が示されてゐるのである。乳首をつむ陰翳の濃さとちがつてゐることは歐羅巴の女には發見し難い乳房の美の素描である。

東洋人種の女は乳房は圓錐型だといつた。その圓錐型も乳首だけが隆起してゐて半球型のいゝ型をしたのも多い。支那の女がこのタイプにあてはまることは伯林で刊行された『百美影』の著作者 Henz Von Perckhammer の蒐集した支那美人の裸體寫真がいかに表現してゐる。

文化人は衣類で衣裳で乳房を虐待し過ぎる。未開人はそれに對して逆である。北歐の零下二十度を降る寒冷期でもラップ種族は室内では女が羅衣ろいになつてゐる。ラップ種族の彼女達は乳房が熱帯地方の姉妹達と同じく垂れさがつてゐる。衣服、とくに肌着と乳房の關係がやがて乳房のエロチシズムを決定することも忘れてはならない。

乳房へ臀肉を

西歐の女が乳房のみでなく胸かくの格好や胸の肉づき、下つては腰の工合から臀しの格好を整齊に保つてゐるのは全體がいゝからだ。けれど、日本の女がいゝゆる洋装をしてゐながらズロースの代りに×××をつけてゐたりするのは衣服の上からみても女性美を壊す。和服の場合でも肌襦袢と××とは一つにしてしまつて都××とかの醜惡な下着(?)を捨てゝしまはねばいけない。

肌着は軀つきをよくするためには飽まで薄いものでなければ駄目だ。

ことに、胸部の筋肉の貧弱な女や乳房の貧弱な女は肌着の厚いのをきて技巧的に効果を求めるよりも肌着は薄いもので胸に乳房にガーゼとか綿とかを乳抑へや乳バンドで柔にふくらみをもたせるだけに乳房などに注意することだ。

反対に、胸筋の隆起とか乳房のゆたかすぎる女は薄地の木綿などで巻いて無理でなく自然に押へて調子をはかる。根本的には、胸の筋肉や乳房を生理的に発達させるマッサージを行ふのである。

脂肪性の胸の女は乳房が、せつかくいゝ型でも見劣りがする。脂肪の少い瘠せた胸の女は乳房が潑潤たる觀をもたない。

乳房はある程度までは發育するし矯正することゝができる。胸のやせた乳房の潤れた女は胸の筋肉と乳房とをマッサージする。このマッサージは直線的でも圓運動でもいゝが必ず胸の下から摩擦運動を始めて乳首までをしづかにしづかに摩擦する。強く激しく摩擦することは大禁物。コールドクリームとかカカオ酪をつけて血液循環を刺激する。マッサージの直前に微温湯の濕布。マッサージの後には冷濕布か冷水でしめすことが効果的だ。

脂肪の過剰からくる胸と乳房との不恰好はやはり摩擦によつて矯正される。オルモンド油六オンス、白蠟三オンス半、ベンチン丁幾一オンス半、ローズ水一オンス半、タンニン粉末六ドラムの混成化粧水でマッサージの時に皮膚に塗り込む。葡萄牙の女は^{だいだい}橙の實を二三箇オリーブ油で四五時間も沸煮して後に熱湯だけでそれを煮直す。その橙の實を輪切りにしたのを、臥床すると胸に押しつけてそれで萬遍となく胸筋から乳房へかけてマッサージをする。これを數週間續けてやると胸筋も乳房も脂肪だけが減退して相當にきゝめがある。

フランスの女が沒藥丁幾、ベンチン丁幾、ローズ水、オルモンド乳液等の方劑で胸と乳房とを矯正して美容を保つ。朝夕、起きた時に寝る時に二回體操をするものも發育矯正にはいゝ。柔軟體操で両手を腰につけたり胸を擴げる動作がいゝ。深呼吸は最もいゝ。

外科的手術によつての乳房の矯正は今日では可能だとされてゐる。十九世紀の末期にウインで乳癌の研究が完成されて乳房の大手術は決して命とりでな

いと信ぜられてから現今獨逸あたりでは盛んに乳房の整美手術が行はれていゝ結果となつてゐる。

小さい潤れた乳房の下部を切開してそこへ臀部の贅肉を移植する。過大の乳房は乳房の下部を切開して贅肉を除去する。巴里では乳房を收斂したり刺戟して型よくするための化粧品がある。けれど藥品が高價なので流行しない。香料に高價なものをつかふので。要はアルコールで摩擦すればよい。塵い薄い香水をふりかけてマッサージしてごらん。長く嫌氣をださずに。

流行と乳房

文藝復興は性的藝術の希臘への還元である。靈に對する肉慾の凱歌である。暗闇の人生から春の目ざめへの展開である。そこに咲いた風俗は力強い性の魅力と現實の血潮があつた。繪畫は乳房と戀愛と性愛とを扱ひはじめた。文藝復興期の代表畫家ルーベンスは男女の抱擁と戀愛とを描いた。豐潤な乳房は彼の藝術的憧憬であつた。

現實の世界に憧れる藝術は、乳房を神の手から奪つて人の手に委ねた。人體の解剖が罪惡でなくして學として確立された。僧侶が性愛技巧を學んだ。聖なる尼僧院が淫蕩の××であつた。マリアは俄然性愛的象徴となつた。畫家フケの如きは乳房を描くためにマリアにその姿をかりた。

乳房は曾て知らなかつた性の神祕を語るものとして、女といふ女は裸體でなくても乳房の露出を以て藝術の生命とした。貴族の女達が進んで乳房露出を羞じなかつた。十六世紀には乳房の露出から××の露出となつて乳房の性慾的鑑賞は變態性慾的な藝術となつた。プッサンの「眠れるヴェーナス」はヴェーナスの裸體美讚嘆でなくしてヴェーナスの裾をひそかにまくりあげてゐるサチ

イールの竊視的興味をもつことを描いた。太腿と乳房、頸と××、竊視的な性生活では乳房だけでは物足りなくなってきた。

十六世紀の歐羅巴の女は、貴族から庶民に到るまで、女は閨房では寝巻を肌につけない風習であつた。裸體の閨房姿は、乳房の視覚的快樂と乳房と××の觸感とをたのしんだ。

ロココ時代の竊視的興味はキリスト教思想の没落であつた。ロココ時代はまさに裸體美の感覺的言葉となつた。「浴するスザンナ」を老人が竊視する。老人には限らない。男は女の肌を、化粧のときに、浴みのときに、××を排泄のときまでも竊視して、性の衝動をたのしんだ。

宗教改革は女の衣裳の改革を齎した。肌をかくし、胸を秘め乳房の存在すらも隠した。バロックとロココ風の衣裳の影響はホルバインの繪でパーゼル博物館にある「衣裳」をみても激しかつたことがわかる。裾は長く襪をとらねば歩く自由がなかつた。その裾はフルビ。ウラーとかフルバラといはれた縁飾りがついてゐた。この縁飾りはとてつけもない高價なもので、それを虚榮のためにつけた。縁飾りつきの^{スカート}裾は臀部の大いのが美人だといふ時代の雰囲気からして腰襠^{フーフ}を入れた。夏は涼しく好都合だが普通の玄關口では腰襠をつけた美人を迎へられなかつたと。畫家ホルバインの畫はホルバイン風をつくつて社交界で持て囃された。ホルバイン風の寝巻は南歐や印度の絹を材料にしてかなりエロティックなものとして珍重された。ホルバインは腹部をせばめて乳房の存在を明白にすることを工夫した。

衣裳の流行の變遷は乳房の美をいかにして美しくみせるかを考量してゐる。スカート^{フーフ}を短くして脚線美を露出して男に挑戦する時には胸はかなりに隠されてゐる。胸と背との肌色の美で男に挑戦する衣裳流行時代には脚線美はかなりに隠されてゐた。

竊視的興味



浴するスザンナ



バロック風とロココ風の衣裳的影響

ホルバイン

をそらく、一九三一年の女の衣裳は脚線美と乳房とをスポーツの影響からして益々露出して来る。現代の尖端的な女の流行衣裳は××を露出し得ない以上、露出することを羞恥するからには、脚と乳房とが衣裳によつて裸體美とつみ乍ら窺視させる技巧とならねばならぬであらう。

乳房をいちめる女

化粧品で世界的名聲をひろめてゐる亞米利加のゴルゲート會社の社長シドニー・モールス・ゴルゲートがついこのあひだ死んだ。追に化粧品王だけにその遺産が幾千萬弗。これが僅に過去十年ばかりで名聲を擧げたゴルゲート化粧品ビジネスの結果としてシドニー・モールス・ゴルゲートが一家庭にのこした遺産だから驚くべきだ。

一體、化粧品なんて藥品以上に儲る。亞米利加のシーク・ガールくらい化粧品化粧劑を朝から晩までのべつ幕なしに消費亂用する女は他にその比を求め難いであらう。

瘠瘦た顔の女が化粧劑一點張りで豊滿な顔の持主にならうとする。頬骨のいやに慾張つたのを、額の急に迫つたのを、コールドクリームやらマ、サージと化粧藥とでなんとかなると信じてゐる。

頭髮の薄いのを生毛精とか強髮劑の化粧劑でもつけていゝ髪にならんと努める。だぶだぶとだぶついた乳房をコントラ、クで一年も二年もかこつて朝晩つけて乳房をいゝ形好にしやうとする。

脚が練馬大根そつくりのを、フレ、スのやうな脚部減瘦劑を念入りに朝晩マ、サージしてレビ、ーのダンサ糞喰への脚線美を夢みてゐる。すんなりした脚線美のためには、外科手術さへも敢てする。小指——もつとも足のだが——

を切断してもスマートな靴の格好美を求めたりする。小指二本切断してしまへば、紐育倫敦の女靴のサイズでは三號以上も小型のがはけることになるから。

胃腸くらい弱めても内服の減瘦劑チロヂンをつかつて脚の贅肉も軀の贅肉もとりさりたいと苦心する。瘠瘦るためにやれバンテング法だとかエブスタインの方法だとかエルテル式だとかの運動法やら食餌法までもお用ひになる。化粧臺を覗けば、そこには沃度、水銀、砒素、レモン液醋酸などの劇薬毒薬の調合劑が瘦せたいばかりに瓶の列をなしてゐる。まるで片田舎のドラック・ストア一位の化粧劑が群雄割據してござる。

こんな女に限つて瘦せたがりつゝビーターだとか何んだとかの精力増補劑だとか性慾昂進劑を忘れず朝目覺めて一盃、夜臥擲にはいる時に一盃。

乳房のエロス發散のためからだぶついたのをふつくりとする。それがコントラックなど用ひたり例のゴム製のローラで、朝夕の入浴後に「可愛いお乳になりますやう」と乳房のつけねから乳首の櫻らんぼへと摩擦するんだ。

そのマッサージの時の、化粧臺の瓶がいくつも顔見世とくる。カ、オ酪、オリーブ油、なんとかのコールドクリームが惜しげもなく胸から乳首へとぬられる。その時かの乳房の櫻らんぼはほんのりといゝ彩りと匂ひ。みてゐても舐め×××××。乳房は彼女達が彼女達の異性へのために、まづかく虐待される。それこそ、この時には男がやさしく手助つてやるべきだ。

もろ腕に、兩脚に、頸筋に、毛深いからと脱毛劑をぬる。女人の凄^{くろ}い女なんぞになるともろ腕の毛を松脂の棒でやく。過酸化水素液をなすりこむ。口唇の彩りの棒紅ぢやなくて深毛退治の松脂棒なだから驚くべきだ。これだけでも一にレート液一にクラブ化粧水で満足してゐるわれらのお婦人達とは千里の距りである。

この後に、いたる處でいたる時にコンパクトのなかの粉白粉がバタバタと



衣裳美か女性美か



消費されるんだから、なんと亞米利加の化粧品王コルゲートが遺産二千萬圓を十年でこのすなんて不思議ではなからう。

乳房は衣裳美の中心

百年のひらきは人情に流行に風俗にもひどい變化がくる。一八三〇年の歐羅巴と一九三〇年の歐羅巴との比較は宛もわが文政天保と昭和の今日との比較である。人情に流行に風俗に甚しいひらきはいはずもがなである。

一八三〇年の歐羅巴はまだ路易十四世時代の遺風が風俗に浸みてゐた。巴里の官廷風俗がその頃の歐羅巴各國の官廷風俗の模範であつた。女の衣裳のときは一にも二にも佛蘭西風そのものがどこでも流行であつた。

引きづるやうな長い、鬘マフの繁シブく多いスカートは女の脚線美を虐待したのみか信仰的な抑壓から肉體の露出は忌み禁じられてゐた。スカートで腰と脚との露出的肉體美が表面にだせない結果が乳房への衣裳上の加工と臀部への加工となつた。腹部をコルセットでぐんと引き絞つた。腰から臀へかけて出来るだけひろげたのが鋼鐵製の七重枷となつた。胸は勢ひ割りびろになつてきた。乳房と乳房との間隔は無理にもひろくするのが脚線美を無視して乳房美の發揮が流行した。

この一世紀前の女の尖端的流行は「一八二九年の流行」がよく物語つてくれる。豊臀と間隔のひろい乳房。すべてが女ののびのびした肉をひきしめて束縛の肉體美が時代的象徴であつた。衣裳婦はわざわざ娘に乳房の間隔を尺で示して納得させてゐるのが目を惹く。肩ひろく腹部せばめて豊臀の衣裳美は脚も足もかくした。丈の低い女は伊太利亞イタリヤで始まつたチ。ツピンなる上背を高くみせるものを靴のなかにひそめた。纏足は當時の婦人美のひとつ。

一九三〇年の婦人美は一言にしていへば衣裳の束縛なき肉體美の露出そのものである。

廿世紀になつての資本主義經濟組織の發達とその廣した爛熟した享樂生活では、信仰も道德も地に委した。女は自由なる立場に解放された。女は自由なる衣裳の嗜好へと眼を放つた。

長いスカートを捨てた。腹部を絞るコルセットは不健康だと知つて薄い肌着に變つた。肩も乳房も臀部もすべてがスポーツ美の象徴となつてきた。衣裳に囚れない束縛のない肉體美、それは「一九二九年の流行」と題した繪畫が一切を説明してゐる。

斷髮。睫毛の逆立つた眼。すんなりと伸びた兩腕。肩、乳房、腹部、腰部、臀部と脚線美との整調した肉體美。一世紀のひらきはかく異なる。とくに、乳房は、その間隔せばまつて陸々たるを時代的象徴となつたことを「一九二九年の流行」と題した繪畫の人形から發見してほしい。

女性美の象徴



一九三〇年の流行



前世紀の流行

西洋情愛綺談集

賣春圖美時代……愛慾の女神ゲ・ナス・メ・フニス……柳腰
か豊臀か……QuimやCuntよりもCulの舒愛……性の神は
海の泡……公然の肉體的感愛……生殖力の旺盛な魚と鳩
……性的喚覺を刺戟する亂舞……古代羅馬人の入浴と腰
の踊……動物崇拜と性的信仰……姦通の刑罰……創生記に
現れた性愛生活……モーセの律法と處女……初夜權の起
因……女淫に耽る僧侶……男色は兇惡……聖約全書に現れ
た男色……哲學者と美少年……娼室と奢室……腐爛的興味
……男色俱樂部

賣春圖美時代

古代希臘のはじめ頃、歴史上でいふところの希臘の英雄時代だが、その時代には英雄時代らしい性慾觀が古代希臘人の信念を把握してゐた。

希臘の英雄時代には賣春圖美が行はれた。それが、希臘人の神々崇拜思想に結びつけられてゐた。ゲ・ナスとアドニスの崇拜觀念をとりいれて、いちじるしく洗練された意味の性慾満足^{sex satisfaction}の形をとつた。

この藝術的好愛心の強烈な希臘民族は、かなり性慾觀では徹底した民族だつた。アフロディートの崇拜は賣春の讚美にほかならない。その時代一般に行はれてゐたし、或は東方諸民族から自づと傳はつてくる様々な××××の××の諸方法に應じて、それぞれの×××の守護女神が信仰されてゐたのである。

プラトーンがその「饗宴篇」のなかで述べてゐるようなウラムスの娘としてのゲ・ナスである。ゲ・ナス・ウラニアとゼウスとディオネの娘としてのゲ・ナスであるゲ・ナス・パンデモスの二つの艶姿のほかに、なほ種々なゲ・ナスの姿態があつた。それから様々のゲ・ナスの姿態は、希臘民族の男女が理想として好んだ性交的姿態であつたのである。それぞれ特殊な姿態が、*mouquere* 型をもつた女神の彫像として後代に遺されてゐる。

アテネの執政官ソロンは、公立賣春所を設置した。執政官ソロンは、希臘民族の性的生活の合理化を政治にあらはした。

ソロモンはアテネの市民をして、性的交渉を二つに制限することによつて、アテネの市民として婦女の處女性を保護してゐた。アテネの男性市民は、國家によつて購入された女奴隷を、自由人としての男性市民の性慾充足機關と

して許されてゐた。未婚の男性市民は、市民権を自由人として享有することによつて女奴隷を自由に蹂躪した。男性市民権には賣春婦を抱擁することのできる権利が一部ふくまれてゐたのだ。

ソロンは、強壯な精力絶倫のアテネの青春にとんだ男性市民の性慾の解放を實行した賢者であつた。その他方では犯され易い女性市民の處女性を保護してきた。

女奴隷の賣春婦は、男性市民の性慾充足機關としては決して侮蔑どころか一種の尊敬を拂はれてゐた。女奴隷が賣春婦として自由市民の男女のなかに生活しゆく時には、希臘民族の民族的尊崇心を昂めてゐた美の神ヴ・ナスを賣春婦の守護神としてゆるされてゐた。

愛慾の女神ヴ・ナス・メラニス

美の神ヴ・ナスが娼婦の守護神となつては、それをヴ・ナス・ヘテラとよばれた。またはヴ・ナス・ホルネといはれて祀られた。その神殿は、アビドスに建てられてあつた。

このアテネの公娼婦ともいふべき女奴隷の娼婦群は、××行爲にあつて×××××を崇めた。これを人格化した女神ヴ・ナス・バリバシア・デイヴアリクトリスは、性的交渉の希臘民族の象徴とも崇められてゐたのだ。

女神ヴ・ナス・バリバシア・デイヴアリクトリスは性愛の守護神といふよりもむしろ××の象徴といふのが正しい。

娼婦が崇めたヴ・ナスのほか、既婚の婦人達が、夫婦和合を希ふときにはそれぞれのヴ・ナスが祀られてゐた。

既婚婦人が崇めたのは、黒い女神といはれてゐるが、この女神は愛慾の夜



ボッティチエリ作

乳房をかくすウ・キーナス

を支配し、エロティックな技巧を参拜するごとに授けた。××の技巧をしろしめす黒い女神としてのヴ・ナス・メラニスであつた。この女神はコリント、ナスピス、メラングス等に多くの豪華な神殿をもつてゐた。これらの神殿は晝なほ小暗い森に閉まれてゐたといふ。

黒いヴ・ナスが既婚の婦人からは××××の女神として、夫婦和合のお利益を授けながら、もし、未婚の婦人から崇められた時には、また、この女神が××の不自然な満足を象徴するとみられ、ヴ・ナス・カルストニアと呼ばれてゐた。

このヴ・ナス・カルストニアの女神は、アフロディット・ムスシエアとしては、室内でその××××××××する娼婦の守り神となり、それは今日でいふ××××のつとめもふくんでゐた。乳房と陰戸といふべき同性愛的××××××でもあつた。いろいろと、ヴ・ナスは崇められる婦人達によつてそのお利益を加へたほど、浮気ものゝ象徴であつた。

同性愛の××の守り神ならウルトラ・モダンもきつと不斷に参詣するだらう。さしあたり大銀座に道頓堀京極の横丁にでも鎮座させれば、香詣の煙たゆること夢疑ひなしといふべきだ。

柳腰か豊脛か

さきにもべた性の神のほか、美の神はヴ・ナス・ダルケトスとしては、街頭の娼婦の守り本尊となつてゐた。×××の守護神でもあつた。また、すぐれてみごとな腰部と脛部との性的象徴をもつた娼婦の守り神として、ヴ・ナス・カリビゴスがある。このヴ・ナス・カリビゴスは閨怨にたえられぬ××××××××の對象として信仰された。シチリアにその神殿が建てられてゐた。



浴室のエロティズム

陽光のほのかにさす浴室で、赤裸々な二つの肉塊は、この世でゆるされた女性の肉體美を飽くことなく競つた。妹は、麗しい皮膚の色を姉にまさると主張した。姉は、のびのびと發達した四肢の豊かな肉の波をうごめかして、妹の紅い皮膚の彩りにまけてゐなかつた。肉塊と肉塊とはもつれあつて、その肉體美を主張した。

それが言ひ争ひとなつた時に、ひそかにこの浴室を盗み見してゐたひとりのシラクサ人の男性が、たまらなくなつて聲高に「……姉の方がうつくしい」と窓越しに叫んでしまつた。といふのは、即ちより大きく強い腰部と臀部とをもつてゐる女性のはるかに美しいと叫んでしまつたといふことである。これによつても、いかに××××××よしあしよりも他に求めて止めものが女性の性的手段として存在してゐたことを推測し得る。

柳腰を、古代希臘民族は女の肉體美の極致としてゐた。柳腰でも、それからして大きく強烈な腰部と臀部が整齊されてゐなければならなかつた。

性の神は海の泡

古代希臘のアデンの大政治家ソロンが、アテネの女性の處女性を保護するために女奴隷をして、公娼として公立賣春所を設置したことはさきののべた。これは古代にありがちの宗教的賣淫の弊害と危険とをとりのぞいて、僧侶階級の不正な利得を政府に収めることゝしたのみか、一般の婦女を男性の奔放な情熱と性慾追求から救ひ、男女兩性に性の道徳的感情を目覺しめやうとしたことだ。

アテネでは女奴隷の公娼をみとめるとともに、他方では、アテネ市民としての自由人たる女性に對して賣淫の周旋行爲をなしたのもや、自由人なる男性

市民を性的に誘惑したものは、いづれも極刑の死罪をもつてした。また、女性保護からして自由人たる女性市民と婚姻しないで私通野合したり自己一身の性慾的玩弄物として寵愛するものには莫大な税金が妾婦税として課せられてゐた。姦通は死罪、または両眼を抉り取る刑罰に該當した。それで、アテネの多くの娼婦はたとへその身分が不自由人または奴隷であつても、自由人の女性市民と詐つて、あるひは既婚者と稱して姦通であるがごとくにもちかけては、自由人たる男性市民との××を欺瞞し客から不當の多額の支拂を要求した。

蓋し、古代希臘時代にあつても既婚婦人との淫行は一種の冒険であつた。この冒険は——即ち男女の両性が刑罰に觸れるといふことの危険を冒す——特殊な興味が求められたからである。しかし、賣淫の弊害が比較的僅少であり得たのは一に公娼がアデンにあつたからである。アデン以外のコリントやスパルタには賣春に関してソロンの立法みたいの大膽な立法は存在しなかつた。

古代希臘時代の一大海港地であつたコリントにはアフリカ沿岸から小アジア地方から数かぎりなく多くの外國人が航海してきた。

この海港都市の人々の關心は、これらの海の旅人が、この海都に滞在するときをもつとも愉悅にすごさせようとするに拂はれてゐた。そこには海都にありがちの人肉の市が現出されてゐた。娼婦型の婦女もまた踵を接して海都コリントに湧集してきた。

古代希臘の諺に「罪をつくらずにはコリントへは行けぬ」といふのがある。それほどコリントでは、どの家も、どの軒にも、嫖客と娼婦がひらがつてゐた。海都の家々のまづ殆んど全部が窩娼^{ウチナカ}であり、堂子^{ドウジ}であり、××××の群住するものであつたといつてもよい。性交の神ウァナスがエーゲ海の泡からうまれでたとつたへられるやうに、海港都市の娼婦彼女達は、レスボスやその他の小アジアの島々からわたつては、娼窩をいとなんでゐた。

コリントの娼婦としては、古代希臘民族の娼婦よりも東方諸民族の Tas の女群が幅をきかしてゐた。この東方諸民族の Tas の娼婦群は、生れながらの淫婦であつた。コリントに集散する商人や旅客航海者等に、異常に大きな肉感的快樂を提供するとともに、海をわたつて肉に餓えた蠻人族の心のをくそこまでも滲む性の享樂をしらしてゐた。だが、東方諸民族の娼婦達は、その技巧では當時のあらゆる民族にまさつてすぐれてゐた。彼女達は詐らぬ××××しつゝ、また異常な報酬の支拂ひをもあはせて要求することを忘れてはゐなかつた。

そのころの諸民族はヨブのやうに忍びながら、しかもこのコリントの挑發的な×××の淫樂のパラダイスに嫖遊することを思切ることができなかつた。

だから、古代希臘の古諺に「控られずにはコリントにははいれぬ」ともいふ。アリストファネスはいふ。曰く「賣春婦はこれに近づくものにとつて病菌に外ならぬ」と。また、アナキシラスは「いかなる猛獸よりも、一層危険なるものはコリントの賣春婦である」と。

公然の肉體的疼愛

アテネの市民は、藝術的な市民性を尊んだ。音樂をよろこび、詩をこのんだ。性に對しても古代希臘諸種民族のどれよりも目ざめてゐた。

ソロンの賣淫政策は、アテネの男性市民に對する心やりでもあつたし、女性市民の處女性を尊んだ結果でもあつた。アテネの市民即ちアセニヤンスは性慾生活では、その徹底した享樂境を知つてはゐたし、節度もあつた。

アセニヤンスに對してスパルタの男性市民はいはゆるスパルタン教育がもたらした硬教育でより意志が強く、節制に富んだ市民であつたが、スパルタの

婦女は性的にはさすがに放埒であつた。

スバルタの街邑では、女性市民はアセニヤンスよりも性的に自由で、衣裳などもずつと解放されてゐた。スバルタの女性は、街邑を半裸體のまゝで、ふと股の両側がひらいた短いスカートひとつで、あるけば腰まで××××××××××といつたいかにも挑發的な風采で大道を闊歩した。なかには網目のマントのほか、その美しい肉體に纏ふのはうす衣ももつてしないで、そのまゝ踊りもし、競技もした。極めて破廉恥的に、公々然と、衆人環視のうちに肉體的疼愛に耽つた。また、頻りに×××××××。しかも、それらは職業的の賣春婦でなく自由人としての女性市民であつた。この種の墮落した自由人の婦女の××××××××××、職業的娼婦が飢に迫るやうな状況であつたとも傳へられてゐる。

生殖力の旺盛な魚と鳩

人間生活の歴史のもつともはじめの歩みを物語つてゐる原始時代には、異性ととの自由戀愛がかたく禁ぜられてゐた。愛の囁きも、あたゝかき抱擁も禁斷の扉で封されてゐた。妻も娘もむろんのこと、その他の召女も女奴隷も女性といふ女性は、家庭の人々としては、夫なり父なり主人なりの男性的暴力の大翼でをさへつけられてゐた。この男性的暴力は、家庭で賓客を歡待する宴席で極端にあらはれた。宴席では、人間的の響應の手段として、妻も娘も下女も賓客に對して淫慾の満足をあたへるための性慾的充足物として存在するにすぎなかつたのだ。この女性をもつてする響應の手段は、宗教の名によつてそれが儼にみとめられ、女性はその服従を絶對的に強制されてゐた。

神々が人間の姿で地上をさまよつてをられるといふごとき迷信時代には、一切の女性は宗教律の命ずるところとして、賓客に身も魂も××によつてすべ

てを捧げることになつてゐた。女性そのものもかやうな響應の手段で神の意思に添ふことを期待し希望してゐたといふのだから問題はあこらなかつた。

その時代には、女性は生れながら×××は、卑しい穢れた肉塊とみられてゐた。その穢れた肉塊は、神によつて——その神々はつねに漂泊人の姿をかりて、人間界にあらはれてくるといふ迷信が強く、旅人は神の人間の姿とみてゐた——人間としての女が神的英雄との××によつて聖き女性となれると信じきつてゐたから、漂泊人とか旅人とかを賓客として、貞操そのものを捧げて歡待した賓客との女性心から希願するところであつた。だから、宗教的賣淫と響應賣淫とは、ほとんど時期ををなじくして發生したとみても誤りではない。それよりも、宗教的賣淫はその内容で響應賣淫といつてもよい。

いま、その時代の宗教的賣淫と響應賣淫についてバビロニアの風習をのべてみやう。

バビロニアの支配的權力は、王族とその一黨、そのほかに僧侶階級とで獨占してゐた。バビロニアの首府バベルでは、支配階級の勞力のもとに宗教的賣淫はメリタの神の尊崇と結びつけられてゐたが、首都以外の遠隔の地方では、宗教的賣淫の純粹な迷信に對して、人口の増殖をはかる必要上からして宗教的信仰的の××をさかんに奨勵したのみか、響應賣淫がひろく行はれてゐたのである。

バビロニアの王都バベルで宗教的賣淫のさかんに行はれたのは、それがバビロニア人の尊崇したメリタの神への動行だと信じられたからであつた。メリタの神とは、バビロニア民族にとつてはバールの神とならぶ民族守護の最高最崇の神である。このメリタの神とは、女神であつて大地と水とをしろしめす神である。魚と鳩とが、この女神の神使ひであつたと信じられてゐた。蓋し、魚と鳩とは、いづれももつとも旺盛なる生殖力××力をそなへてゐるもの

と考へられた。それがメリッタの女神のつきざる性の要求と合致するのである。

このメリッタの女神を祀る神殿には、處女が犠牲として不斷に捧げられてゐた。女神のくせに處女をこのんだのは、その神前へ捧げられるバビロニアの處女は、女神の御召に添はんとする信仰心から、よろこんで未知の、ことに漂泊人の參詣人にその肉體も魂も委ねてしまふ。參詣人は處女のもつ性的法悦を味ひ、處女ははじめて女となつて、それによつて性的享樂以上の信仰的法悦を味つたのである。

ひとたびメリッタの神殿に捧げられた處女達は、神殿からひきさがると、みな巫女となつた。

巫女達は、美々しく装ふて、麗しい花輪の冠をめぐらして、メリッタの女神を祀る殿堂をかこむ森の樹陰に端座してゐる。わかきも老いたるも麗しきも醜きも、こゝに捧げられた巫女たちは、神の御召しをまつてゐるが、何をまつのであらうか。

それは、金銀の財寶を神に奉納して「……メリッタの女神の尊いお姿を拜みたく存じます」と希願にくる參詣人との××をまつてゐるのであつた。

參詣人は喜捨や淨財を、神殿におさめて割符を頂き、その割符のしるしと一致した巫女を境内の森でさがしあるく。さがしあてると、さらに喜捨を巫女の衣囊のうちに納めると、巫女は參詣人を森の奥深くに導いてゆく。この巫女への喜捨や淨財もあとでは神殿の役人の手に納められてしまつて、僧侶階級の収入となる。巫女はをのれのもとへきて財寶を喜捨した參詣人に對して絶對的に服従しなければならない。その申し出がいかなることであらうとも拒むことは許されない。

希臘の歴史家ヘロドタスの記述によると、巫女たちの標緻のいゝものは神殿の森に籠つてほどもなく××犠牲となつて神のお召しにかなふことができる

のに對し、醜い容貌の女性は時とすると三年も四年も、喜捨の人をまたなければならなかつたといふ。未知の、どんな風の、みしらぬ參詣人に、身も魂も處女性も捧げよとの女神の旨が、嚴かにバビロニアの婦女に一般的に課せられてゐたのである。

これらの賣淫は、バビロニア民族の信仰心からきたものだ。宗教的賣淫であることはいふまでもないことである。

かやうな信仰的××の風習とあひならんで、バビロニア人はあまりに公々然たる×××××をたのしんだ。××を生命とした數々の不倫と無恥とがバビロニア民族に行はれてゐた。クイントゥス・クルチウスは、この不倫な××と無恥からくる××を憤つて「……この民族ほど性慾的墮落した民族はない。この民族ほど性愛の技巧とか××××××××に熟達した民族も他にあるまい。父母はその婦女が金錢のために未知の男性に身魂を捧げて×××××××許容し、夫は妻に鴛鴦裘以外に×××××××を容認してゐた」と記してゐる。バビロニア民族は、性慾觀をもつたとみるよりも、淫欲觀をよく味驗した民族だといはれてゐる。

性的嗅覺を刺戟する亂舞

淫蕩なバビロニア民族は食卓と酒とを愛した。賓客をもてなすために盛大な饗宴を催すことを好んだ。その饗宴では主人公の妻や娘もその席に侍べる。彼女達は宴のはじめにはきわめてつゝまじやかに控へてゐる。だが、宴酣になるにつれてだんだんと性的昂奮を昂めてくる。まづ、羅衣からして着衣を一枚一枚とぬぎさつてくる。その酒宴の歡樂が最高頂に達するじぶんには、人妻の年増ざかりの濃艶な裸體美も處女のみずみずしい娘の豊艶な肉體美も、紅間の

翠帳のかけでだけ眺められる艶麗さを宴席でみせびらかしてくることとなる。貞淑な人妻も温良な娘もまつたくの赤裸々となつて、肌に羅衣もつけずに、その夫、兄弟、賓客の前で亂舞する。亂舞しつゝ彼女達はことさらに賓客に×××××は接吻を強ひ、賓客はすべての女性に××××××××××××ねばならぬのである。

賓客が上流階級の人々であればあるほどに、女性達の裸體亂舞ははげしく一幅の春宮となつてあらはれてくる。裸體の妻は××を賓客の×××感觸させ、性的にはまだ發達せぬはずの娘は賓客に××××××××を示すのだ。

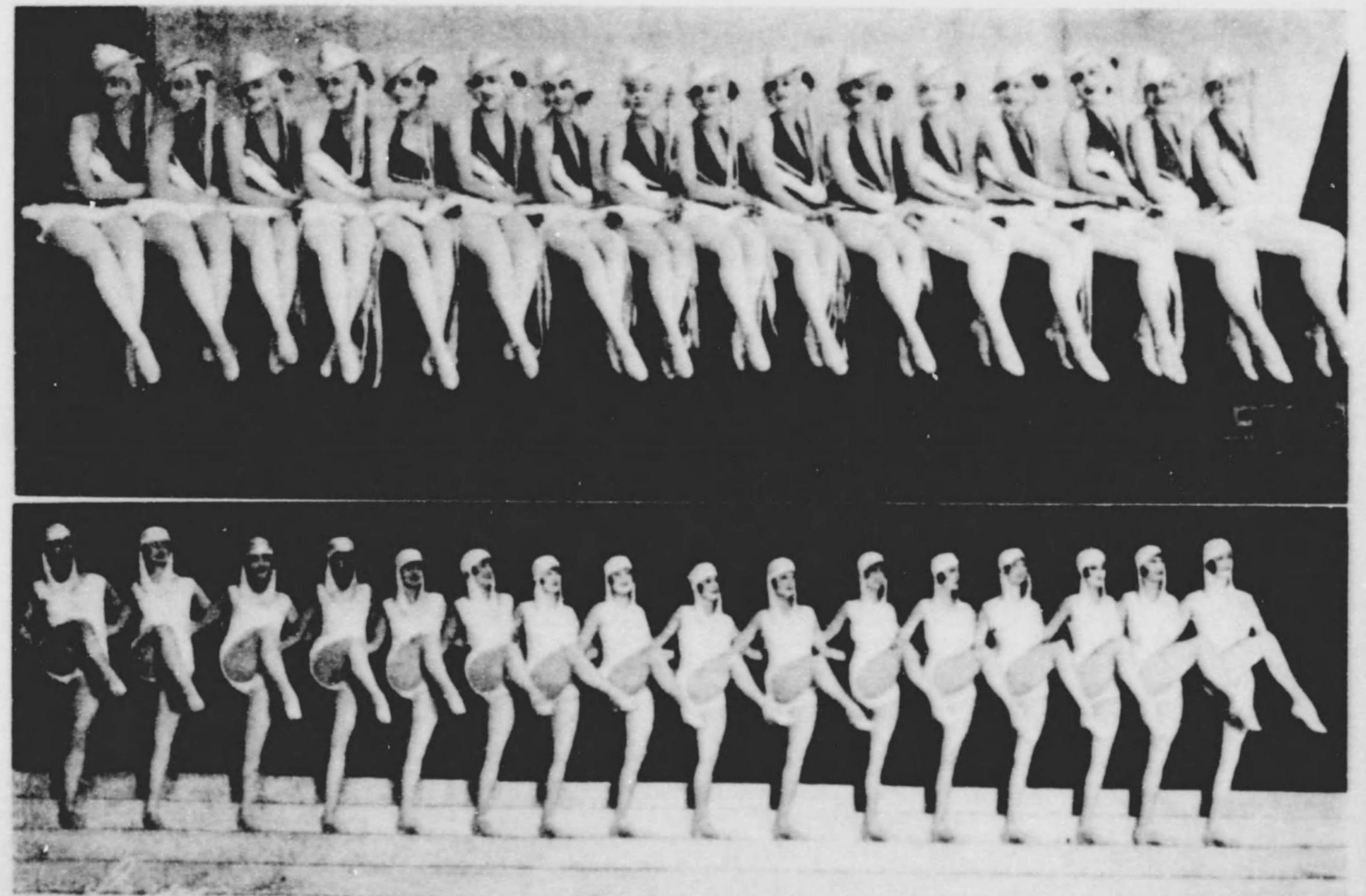
亂舞し抱擁し、その果は接吻と祕戯とが、×、××××××賓客のために提供されても恥じない。それどころか、亂舞中にしばしば彼女達は×××××を巧妙な指尖で××××××××××××××××、異性の性的嗅覺を刺戟昂奮させてくるといふ性的亂舞とまでひらかれてゆくのであつた。しかし、彼女達は、亂醉と亂舞と昂奮のうちに、賓客を擁して閨房へといそぐ。賓客を中心に母と娘とが性的抗爭を××××××。年わかき娘は年増ざかりの母の×××××××××××。これが響應賣淫といはれてゐる。

バビロニア民族がこのんだ宗教的賣淫は、信仰的なものとしても、すこぶる不自然な性的歡樂であつた。不自然な性的享樂は小アジアの他の諸民族、ことにヘブライ人のなかでもさかんに現れてゐた。それらも民族的尊崇の女神のメリッタ、パールとかモーロクの神崇拜の迷信からであらはれてゐる。

イスラエルの歴史をみると、そのすべての章を貫いて、パール崇拜に対する豫言者の抗爭がある。モーゼの書に「……イスラエルの子等、及びイスラエルに住む外國人のうち、その××をモーロクに捧ぐる者は享樂的に昇天すべし」とかゝれてゐる。

神パール崇拜よりいでた無恥の淫蕩行爲は、小アジア全土に傳播した。ギ

脚！
脚線美！



ロシアの史實家ストラボンによると、アルメニア人がアナイティスと呼んで崇めた神は、バビロニアのメリッタ女神に相應する愛の女神であるといつてゐる。アルメニア人のアナイティスの神も尊嚴な神殿に祀られてゐた。神殿は石壁によつて圍まれたひろびろした地域を占め、そこに參勤する巫女はやはりバビロニアのメリッタの神殿の巫女達とをなじやうに、參詣の外國人と××を結んだ。

小アジア諸民族のうちのシリア人もフェニキア人も、バビロニア人に類似した宗教的信念からして、宗教的な淫樂と靈應賣淫を行つた。それがシリア人でもフェニキア人でも「市民の義務」となつてゐた。この兩種族は兩性をそなへた淫慾の神アスタルテ(Astarte)を崇拜した。この淫慾の神は、性的苦行、去勢、女兒犠牲などをことさらにこのんだ。その慘虐な神意をなだめるために處女性を捧げた。その夜祭りは極めて壯大なもので、男は女の扮装をし、女は男の衣服を着て極端な無禮講を發揮して、數かぎりない××××××××。この祭の司會者は、神殿に奉仕する最高位の長老である。

カルタゴの婦女は、女神に仕へて處女性の犠牲を捧げることによつて、彼女達の結婚持參金を獲ることと定められてゐたのだ。カルタゴのサイプラスの若い女性達は、夜な夜な海岸の街邑をさまよひ性能を漂泊の外國人に賣つて、將來の結婚のために持參金を稼いだ。この未婚の婦女が東方からの漂泊人に××をうつて結婚持參金をかせぐことは、フェニキヤやそのほかの地中海の沿岸の街邑々々で行はれてゐた。現代の性的理念を以つて律することのできない迷信的な性慾觀が彼等を支配してゐたことは、この僅かなる例を以つてしても明かであらう。

メッサリナといふ不自由人の女性が彼女の性的×××の熟練から王妃とまでなつた。飽満をしらぬ肉慾物語は古代ローマ時代の代表的なものであつた。メッサリナといふ名はそれからしてある種の概念として用ゐられてゐる。メッサリナは姿を變へてリッサと名のり、二十五人の強壯な羅馬の若人に身を捧げて、しかも「……それによつてすこしも倦むことを知らず決して満ち足るといふことはなかつた」といはれてゐる。

當時の羅馬の貴族階級の婦人は、概ねメッサリナ的の××××で、すべての享樂よりも唯一圖に××によつてのみ耽溺した生活をおくつてゐた。メッサリナはその亂行募つて、ついにクロディウス王の怒りに觸れ、刑吏に引きわたされることになつた。

オーガストゥス皇帝の内親王なる老ユリアは、ローマのフォーラムで公然と賣淫したために紀元二年、皇帝からパンダテリア島に追放を命ぜられ、後レギムに移された。彼女は紀元十四年にそこで死んだのであるが、依然としてこの地で×××を擅にし、同地のマドロス等を對象にその×××を試して楽しんでゐたといふ。

×××の賣淫、それは生活のためでなく淫慾の昂進が強ひたのであつた。いかにも淫樂のローマのプリンセスらしい。

哲學者にして皇帝なるマク・アウレルの皇后は、一種の色情狂であつた。メッサリナの如く不倫を極めた婦人であつた。フェースチナと名づけられる。この王妃の性格はたしかに近代的なエリザベス女王とかカタリナ十二世とかに類似してゐた。

これらの女王が兵士や士官に情夫を求めた如く、フェースティナもまた騎士や水夫の中にその寵人を求め、且つ××××××××。

或る狂人の王はその宮殿をば全く侍女と侍童との巢にしてしまつた。時と

しては四人の裸體の美女を黄金の馬車につなぎ、自らも裸體でその馬車を駛したと傳へられてゐる。

古代羅馬人の母はみな娼婦であるといふことも一面にはいへるのである。しかも、大羅馬をして瓦解の悲境に陥らしめたものはやはり性的亂交と賣淫とを中心とした羅馬市民の性的享樂氣分であつた。だから、『神曲』の作者ダンテが、古代の羅馬の延長であるイタリアを偉大なる淫賣窟なりと嘆じてゐるのも史的に首肯し得る。

陽物崇拜と性的信仰

印度に現れた陽物崇拜は、移つてエチプトやギリシヤにも流行した。その起原は、印度の古い傳説にあらはれてゐる。

それによると、印度の苦行者たちは彼等の捧げる多くの犠牲や祈禱の力によつて、不可思議な神通力を得ることができるのであるが、この力が長く失はれずにあるためには、彼等と及びその妻たちがつねにその心の純潔を保たねばならない。でなければ、この力は忽ち失はれるのである。こゝに溼婆と呼ばれる大自在の神が、これら苦行者達の妻の美貌の評判の高いことを聞き、これを誘惑して罪を犯させてみようと思ひついた。そこで、溼婆といふ大自在の神は彼みづから回々教の托鉢僧に姿を變へ毗髮拏といふその同族をして美しい娘の姿に化身させて、まづ苦行者を誘惑せしめた。

この美しい魔性の娘がひとたび苦行者達の前に立つと、多年の難行禁慾の心もどこへやら、彼等は火のそばへ置かれた蠟のやうに心を溶かされ、夢見心地に彼女の後を追うた。一方溼婆が托鉢僧の姿で、手に花瓶を持つて唄を唱ひはじめるとその唄の聲のもつ不思議な魅力に惹きつけられて、苦行者の妻たち

はしだいしだいにそのまはりに集まつてきた。唄がよいよ高調に達すると彼女等はいつしかその魅力にみづからの力を失ひ、その身につけてゐた飾りはずし、その衣をも段々と脱ぎすて、ついにはまつたく天衣のまゝなる姿で、この唄唱ひの後を追ふやうになつた。

溼婆は、彼女等をかやうに巧みに街外れの森のなかに導き、首尾よく淫慾を妻から蘇生させることにその所期の目的を達した。やがて、苦行者等は迷ひの夢から醒めて、彼等の法力が昔日の偉大さを失つて脆くも誘惑にうちまけたことを悟つた。彼等は若者の姿に身を變へて、その妻を迷ひに導いた者が溼婆であることも知つた。

また、彼等自身を誘惑した美しい娘も、實は毗髮拏の化身であつたこともあきらかになつた。彼等は、この淫神に復讐すべく、これを殺さなければならぬと決心した。苦行者は力を合せてもつとも熱誠なる祈禱と懺悔とを行ひ、もつとも峻烈な犠牲を捧げて渾身に思ひを籠めて溼婆を呪つた。

この犠牲の大いさに、神と雖も彼等に神通力を拒むことができなかつた。力を得た苦行者達は炎のごとく溼婆に迫り、溼婆の×××をひつ掴むや矢庭にこれを抜きとつてしまつた。

しかし、溼婆の力はさらに強かつた。彼の抜き取られた×××は不思議な魔力を發揮して、みるみるうちに全世界を火炎についでしまつた。

この大事件に直面しては、梵天と毗髮拏とが心痛して憂ふところとなつた。即ち、梵天も毗髮拏も彼等は一切の×××を保護する責任があつたからである。

そこで、溼婆の亂行を止めさせようとした。毗髮拏は自ら女性の生殖器の形にみづからの姿を變じてあらはれ、暴れ狂ふ溼婆の×××を受留めた。全世界を焼き盡さうとする大火事はこれで止んだのであつた。

淫婆は和解の申し出を承認した。

世界を焼くまいと誓った。但し、それには条件がある。即ち、もし人々が断ち切られた彼の陽根をば神として崇めぬならば、火によつて世界を滅亡させるといふのである。

これを言換へれば、彼の××を崇拜すれば、彼が世界に撒布した花柳病の病菌によつて世界を滅すまいといふのである。人々はこれに従つた。

そして、それからのちは印度に陽物崇拜がはじまつたのである。

陽物崇拜は單に生殖力の讚美に起因するのみでなく、同時にまた花柳病の豫防といふ意味をもつてゐるのである。ベナレスの祭りには銅や象牙で拵へた×××の像を僧侶が胸に捧げて歩くのである。

信者は敬虔な祈りの心をもつてこの聖體に接吻する。

婦女はこれを花で飾り立てる。このエロチックな祭儀が行はれる時には、市民は超階級的になつて、男女は全く相手を選ばず、淫事に耽ることが梵天の名によつてゆるされてゐるのである。

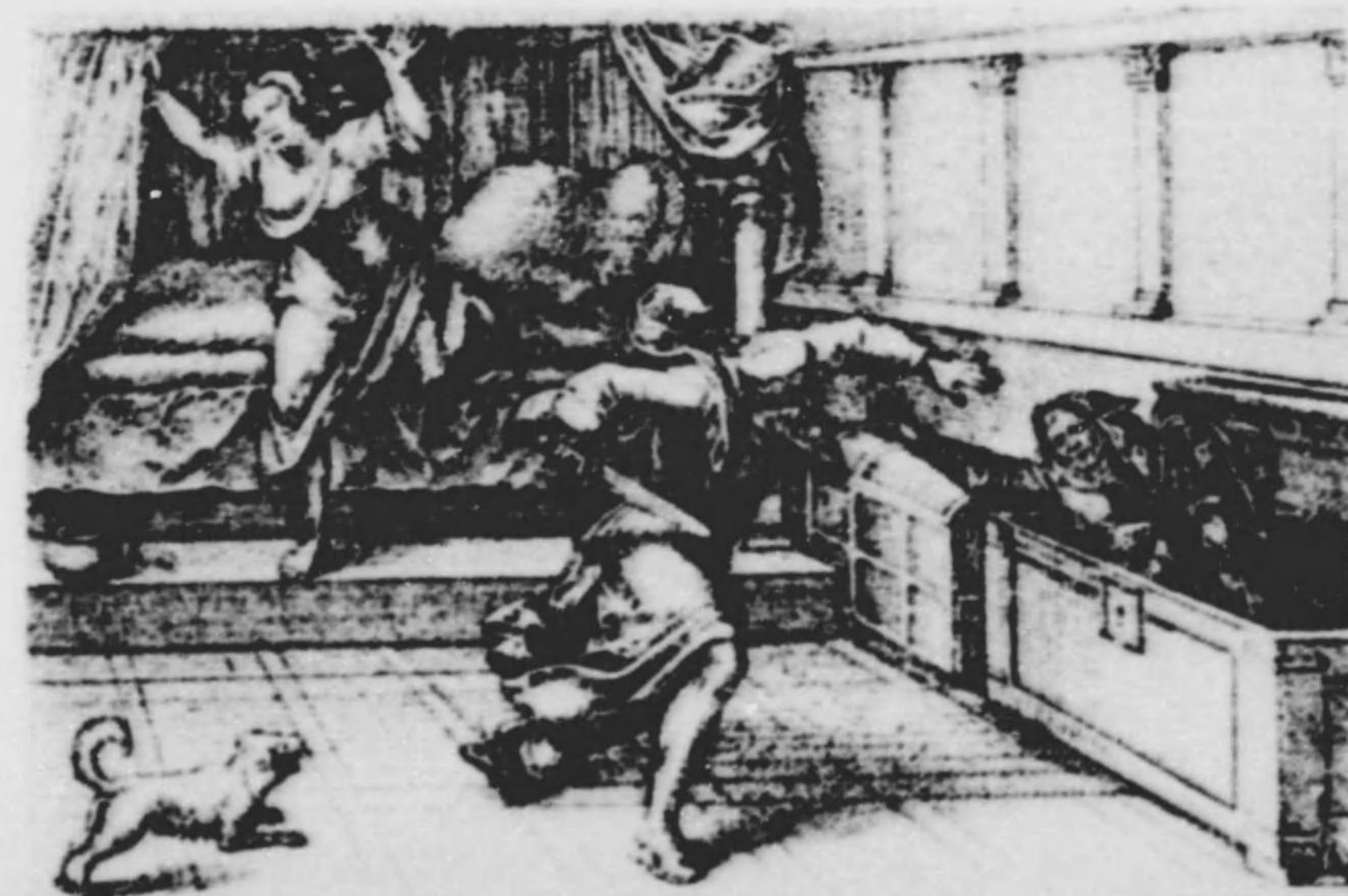
姦通の刑罰

遊蕩的な古代羅馬民族。それは羅馬風呂がすでに説明してゐる。

ボンベイの埋没物の發掘で、いかに古代羅馬民族が、うきうきした性慾生活をしてゐたかを推しはかることができやう。古代ローマ民族の性的交渉は、古代ギリシヤ人のそれと姉妹關係をなすものである。他のすべてのローマの文化と古代ギリシヤ文化の繼承に於けるとおなじごとくに、賣淫とか性的亂交とかの方面にでも、古代ローマ人は古代ギリシヤ人のを繼承してゐるといつてよい。だが、古代ローマの姦通の處罰は實に奇抜だつた。



古代銅版



古代銅版

賣淫が羅馬の國法によつて定められる以前、古代羅馬には嚴格な道德が性的領域にわたつて存続してゐた。性道德は頗る峻嚴であつた。姦通罪——即ち有夫の婦と男性との肉體的^{トキスツアイ}姦愛の場合——のでは、姦婦は罰として衆人環視のなかで驢馬と×××しなければならなかつた。

かうした深刻な刑罰を受けてひとたび社會的に葬られた婦女達は、その社會に儼然たる性的理念や性的道德が存してゐればゐるだけに、眞面目な生活にもどれずして、やがて性的亂交の女群として古代羅馬に於ける最初の賣春婦への墮落の道をたどつてゆくのである。

姦通罪の處罰には、一人の姦婦が數百の民衆の手にまかせられ、弄ばれる刑罰もあつた。

姦夫に對しては、妻を犯された夫が、姦夫の××した××を斷ち切る權利をゆるされてゐた。

古代羅馬民族のうちでは、姦夫は一般に去勢の罰を被り、姦婦は××をゑぐられて、高塔からつき落とされた。古代猶太人の掟としては、姦通罪は死罪であつた。

古代アラビヤ人の間では姦婦は首を切られた。これなどはさすがに××に手をふれはしなかつた。キリスト教が古代羅馬で國教となつたころには、クリスチアンの婦女と姦通した密夫は××を切斷され、姦婦は××××されて×××をのまされた。古代インドでは、姦婦は犬に喰はせられたといふ。

古代日耳曼人は、そこへゆくとゲルマニアの森林民族だけに慘兇をこのんだ。姦婦を裸體にして村中引まはし、のちに鞭を以つてこれを打ち、かくて死に到らしめたものである。なかには、主として北獨逸の山岳地方では現今でもなほ古代羅馬の如き姦婦刑罰が行はれてゐる。即ち、廣い野原の真中の一本の樹に姦婦はそれに縛りつけられた。通行人が欲するまゝにこれを××××られ

てゐる。ニ、ウ・カレドニアにもこれに類似した姦婦刑罰が現今でも行はれてゐる。

創生記に現れた性愛生活

賣淫の問題は、性的生活にくるしんだ古代猶太人にとっては、由々しきひとつの社會問題であつた。

イスラエルの歴史を繙けば、その歴史の全部が賣淫と性的享樂に對する爲政者や豫言者の抗爭によつて貫かれてゐるといつても敢て過言ではない。現代の社會問題の中心が「生きてゆくため、生活のため」であるのに對して、古代猶太人には性的生活に關する問題が、社會問題の核心であつた。性的生活の解決にくるしんだ古代ユダヤ人には、宗教的賣淫のほか、その他いろいろの形式をとつた一般的の賣淫もすでに流行してゐた。

舊約全書には古代猶太人の法律宗教によつて定められた賣淫について多くを語つてゐる。また響應賣淫についても記述するところが多い。

舊約全書の「創生記」をみると、ノアのころに、天使が族長の娘のもとに舞下つて一夜をそのかたへに過したことがしるされてある。かやうにして、墮落した天使と族長の娘との一夜の淫寢のあひだに生れた子等が、神に背ずしだいしだいに神を忘れるやうな振舞にでることが多かつたので、神は遂に大洪水によつて「凡て生命の氣息ある肉なる者を、天下よりほろぼし絶つた」のであると。墮した天使と族長の娘の××がノアの大洪水となつたとすると、神様も案外の嫉氣もちだといはねばならぬ。

賣淫に關する最古の事例は「創生記」の三十八章のタマルの物語に現れてゐる。

タマルはユダヤの子エルの妻となり、後にその弟オナンの妻となつたのであるが、いづれの夫にも死に分れて寡婦となつた。また、いづれの夫からも子を産まなかつた。タマル彼女が二人の夫の弟である、やはりユダの子のシラに婚姻を求めた時、シラはこの石女の乞ひを拒んだ。その時に、タマルは娼婦に身を裝つて舅のユダを誘惑しそれによつて妊娠した。「……彼女（タマル）その寡婦の服を脱して被衣をもて身をおほひつゝ、みテムナの途の側にあるエナイムエナイムの入口に座す、其はシラ人となりたれども己これが妻にせられざるを見たればなり、彼その面を蔽ひむたりしかばユダこれを見て娼妓ならんとおもひ途の側にて彼に就き請ふ來りて我をして汝の所にいらしめよといふ、其はその子の妻なるを知らざればなり——彼ユダに由て妊娠し、彼起て去りその被衣をぬぎすて寡の服をまといふ……」云々とある。

こうして、タマルは彼女が前夫によつて兒女をもたなかつたことが、彼女自身の罪でないことを、事實をもつて證明したのみか、娼婦に假裝して十字路にたつて舅の通りかゝるのを待ち伏せしたといふタマルのこの物語は、はやくも紀元前二一〇〇年の昔に、すでにこの現代社會の病ともいふべき「悲しき職業」賣淫がユダヤの女性の間に存在してゐたことを語るものである。しかし、舅を道に擡してしかして……妊娠したといふ。いかに古代猶太の性的生活が亂れてゐたかは、このタマルの物語でもわかる。

モーゼの律法と處女

モーゼの律法は、ねんにはねんをいれて、古代猶太の「處女」に對しては、結婚前に男性に身を委ねることを重い罰によつて禁じてゐた。しかも、かやうな條文の裏にかくれて、民族の神ヤハウェ神の崇拜とそれにとともに男色の流行

がはなはだしかつた。それは、モーゼが律法をもつて賣淫も禁じ、處女との私通をも嚴禁したからであつた。

當時、モーゼの掟が儼かに賣淫を禁じたのには、よかい根據がある。その理由とは、エジプト放浪中に猶太人婦女が疫病（瘧毒）に犯された、といふことである。巴且杏のやうに黒い目と、珊瑚のやうな唇と、真珠のやうな齒とを持ち、やさしく柔い姿と、よつくらした胸とをもつ美しいユダヤの娘たちがこの奇怪な病に感染したのである。

人々はいろいろとこの病について心を悩ました。モーゼの儼かな戒律はかうして成立した。ユダヤの婦女を保護するために、人々はこの掟を容認した。賣淫に代つて男色が流行した。

けれど、パール神の崇拜は爲政者モーゼよりも勢力をもつてゐた。森や山のあひまなどに隠れて建てられたパール神を祀る寺院には、男女の賣春群が群居してゐた。男の賣春群即ち男娼が古代ユダヤでは發生してゐたのだ。それによつて獲た財寶は凡てパール神の祭壇に捧げられた。

しかしながら、民族がもつ本能的な性の無節制とその墮落は如何ともし難かつた。ソロモンの殿堂は娼婦と周旋人との一大取引所に外ならなかつた。クリストが寺院から追出したと傳へられる商人は、實はかゝる周旋業者にほかならなかつたのだ。また、マリア・マグダレナは娼婦の守り神となつた。時世を憤つたエゼキエルの書にいふ「汝のうちにその隣妻と憎むべきものを行ふものあり、邪淫を行ひてその嫁を犯すものあり、その父の女なる己れの姉妹を犯すものあり」と。こゝに到つては、邪淫も賣淫も民族の日々の生活の連続となるのみであつた。

この種の邪淫破倫はペルシャ、アラビヤ等にはしばしば行はれたらしい。アルタタセルクセスはその娘と、アレキサンダーとプトレマイオスはその姉妹

と、有名なクレオパトラ即ちシーザー及びアントニウスと共に淫蕩な生活を結んだこの女王は、事實として傳へられてゐるところによると、アントニウスと關係を結んでゐた當時、變装して秘かに公會堂に歩み運び、そこで一〇六人の男性に身を許して、しかもなほその異常な慾望を充分には満足させることができなかったといふことである。

あるアラビヤの王女が十五人の兄弟をもつてゐたが、家法に従つてこの十五人と××しなければならなかつた。彼等十五人の兄弟はその姉妹を交代に×××、おのゝ争ふことなき性の生活を営んだとローマの文學者は書きのこしてゐる。

古代埃及のイシス崇拜もまた、飽くことなき肉慾と、宗教的賣淫との混合に外ならない。ヘロドタスの記すところによると、クレブス王の王女は父王の命令のもとに魔窟に籠つて父王のためにピラミッドを築く費用を稼いでゐた。彼女は自分を購ふ一人々々の男から一つ宛の石を請求したが、年経るに及んで石の数は次第に殖え、遂には父のピラミッドの外にもう一つ別にピラミッドを建てること出来るほどに山積したといふ。一斑以つて全豹を推すべきであらう。

初夜權の起因

政教混合時代ともいはれた歐羅巴の中世紀は、政治上でも信仰上でも懷疑的になつてゐて社會的不安と動搖とが漲つてゐた。かやうな社會的不安と動搖の時代的雰囲気の中をなつかぬいてもつともよく中世紀の特色をあらはした封建制度が確立されてきた。封建制度のもとでは、自由農民が生活の安定を武力階級に求めた。その代償として、農民は所有地と家族のうちの強壯な男子を保

女淫に耽る僧侶



中
世
紀

秘密の窩娼であつたともみられる。

元來、尼僧が絶對的禁慾主義の生活に壓迫されてゐるのは不自然な生活であつた。いかに信教の憧憬と勤行があつても、尼僧園に出入する男僧との性的關係は、かへつて尼僧院といふ宗教的禁斷の園を利用して、極端にまで發展して行つたのである。

僧侶階級とあなじに武士階級も亦性的××では猛威を擅にした。軍隊と賣淫とか戦争と賣淫の相關的事實は、中世紀の混沌たる暗黒時代の連続した戦亂の惡の華そのものであつた。

一〇九六年から一二七〇年に到る七回の十字軍の遠征が、歐羅巴諸國の花柳病蔓延の機會としてのちに醫學者の爲に病毒の傳播に関するよき史實となり、ことに黴毒については好個の史料となつてゐる。

また、十字軍遠征の失敗は歐大陸諸國の經濟的破綻を招くとともに、各國の男子數を甚しく減少させた。經濟的破綻は生活不安と不景氣を招來し、男子數の減少は婦女の過増となつて、そこに必然的に賣淫の發達の原因となつた。賣淫はかくして、靜止的賣淫から必然的に進展して移動的賣淫とまでなつた。その頃の娼婦達は軍隊とともに行動し、戰場を性的××の取引所となしつゝ、娼婦達は白晝は軍隊の補給品を運輸のために活動し、陣地暫濠にあつては防戦の手助までした。文字通りに娼婦達は娘子軍であつたが、むしろ奴隸的存在であつたのである。

中世紀の封建制度の華と誇られた騎士は、決して武士道の權化とばかり認められぬ。性交的には騎士は暴力團的存在であつた。武者修業を口實にして武力暴力によるあらゆる横暴暴逆ぶりは、江戸幕府末期の旗本の狂奔ぶりと類を一にした。品格ある騎士は追劔であり強盜であり暴行者であり殺人犯であつた。貴婦人を尊敬し女性を崇拜したのは極めて御都合主義的なものであつた。

騎士等には賣淫の制度は不必要であつた。だが、一面では騎士は賣淫の制度のよき保護者ではあつた。

男色は兇惡

古代猶太の民族の神バールの神殿をとりまいて男女の賣春群が群居してゐたのは、性的生活に重い枷をはかせられてゐた古代猶太人の両性が、いづれも××××によつて××××ぜんとした自然の現象であつた。

なかにも、古代ユダヤの男色や男娼の現象は、たゞに變態性慾の一表現とみるべきではなく、常規的な性慾觀のひとつであつた。

ソドミーが、わが國の男色であり、××であり、その手段が××であることはおなじであつた。ソドミーのその前接詞のソドムは、古代猶太民族の首都パルスタインの都邑の一名稱であつた。ソドムとは兇惡の巷を意味してゐた。

兇惡の巷は、そこにあつまる猶太人が變態的な、といふよりもむしろ兇暴的な性的交渉をさかんに行つたから發したのである。

人によつては、××はひろい意味でソドミーを指してゐるが、××は男色の××手段と古代ユダヤでは解釋してゐた。猶太王ダビデが美少年ヨナタンを寵愛したことも、舊約全書のなかの性的傳説のひとつである。

古代猶太民族は、囚れた信仰的性慾觀から男色への方向轉換を企てた先驅者だ。

希臘神話に現れたジュピターと美少年ガミーニードの男色變態戀愛の傳説は、傳説時代の男色のもつともすぐれた物語であると。同時に、古代希臘のあるひはそれに端を發して後代の文明時代の西洋文明國に男色の存在を物語る有力なる資料ともならう。神々の生活でも、氣性のあらあらしいジュピターは、

端麗なる姿の美少年ガミーニードに魅惑されて、神の姿を驚になつてガミーニードを引さらひ、ジュピターの愛嬢ヒービーの女の姿をよそはせてひるもよるも身邊に侍らせたといふ。神が男色變態性慾に溺れて、如何なる暴力をもつてしても慾望遂行を取てしたんだから後世の人間がよか稚兒をおひまはすのも人間味のひとつとして許されもしやう。

舊約全書に現れた男色

舊約全書では男色の流行した事實をあきらかに發見することができる。ユダヤの王ダビデがサウ王の愛兒ヨナタンを愛したのはあきらかにいれてゐるのである。

……兄弟ヨナタンよ

我汝のために悲しむ

汝は大いに我に樂しき者なりき

汝の我をいつくしめる愛は世の常ならず

婦の愛にもまさりたり

父サウル王はその交情を難じてつぎのごとくいつてゐる。

汝は曲り且つ悻れる婦の子なり、我豈汝がエサイの子（ダビデのこと）を遣みて、汝の身をはづかしめ、また汝の母の膚を辱しむるを知らざらんや
四千年の昔、パルスタナの首府ソドムに流行したこの事實は遂にソドミーなる言葉となつたことは、今更に紹介するには餘りに有名過ぎるものである。二人の美しき少年旅客を冒さうとして、市民は群集して門に迫つた時、宿の主人はその娘二人を提供して換へようとして許されなかつた、といふ傳説は、如何に男色が女色を壓倒してゐたかを立證するものである。

ソドムのこの風潮は隣國のゴモ、ラセボインに感染して流行を極めたので、天帝は天火を下してこの國を滅したといふ。偶發の自然事、それは石油坑に雷火が落ち、ヨルダン河が氾濫したことを斯く傳へたものであるとされてゐるが、天帝の所業とした所に、當時の人の男色に対する思想を窺ふことができるのである。

それはいふまでもなく、不倫の行ひであり罪惡であつた。否、不倫、罪惡としてこれを警しめなければならない程に太古から盛んに行はれてゐたのであつたからである。

日本の傳説時代についての西鶴の記録「男色大鑑」の

天照大神のはじめ、浮橋の河原にすめる、尻引と云へる鳥の教へて、衆道にもとづき、×××××を愛し給へり。萬の蟲までも若契の形をあらはすが故に、日本を蜻蛉國とも云へり、云々

は、彼一流の大ヨタであるが、衆道の起原を天照大神の時代にもつてきたところ、江戸文學特有のナンセンスの興味と、愛すべき稚氣とを窺ふことができるであらう。

哲學者と美少年

歐羅巴古代に於ける男色のうちで、最も異彩をはなつてゐるのは、古代ギリシヤの哲學者の男色と、ローマに於ける男色の社會的流行である。

ソクラテスがアルキピヤデスと交情を密にしたために、妻君から叩き出されたといふ逸話をもつとも傑出したものであるに相違ない。哲人プラトーンの男色は、單に實行ばかりでなく、哲學理論によつて辯護した。彼のその哲學理論によれば、男女、或は夫婦としての性愛は平凡なる普通人の行ふ行爲である。

男色は理智的な哲學者の特權であつたといふのである。換言すれば、哲學者は性愛技巧にかけては、古代ギリシヤの性愛的特權階級の一部である。男色は、當時は上流知識階級の特權であつたのである。尠くとも哲學者にとつては、古今を通じて男性にとつての不變の惱みである女のおしやべりでやかましいことは、眞理の探求に妨げあるものであつた。かるが故に、美少年を愛するといふ口實をもつてしてゐる。だが、實は、當時の特權階級の流行であつたもの、辯護であつたに過ぎないのである。しかく觀察することが確かである。

哲人でもアリストールは、男色ばかりでは性愛的飽滿状態になれなかつた。彼は、おそろべきマゾヒストで、その愛人フィリスの慘虐な性愛技巧に對していつも奴隸的奉仕を捧げてゐた。

ギリシヤに於ける藝術の發達は、女性美と同時に男性美をその對象として取扱つた。彫刻に於て、繪畫に於て、詩、戯曲に於て、男性美の讚美は甚だ多い。だが、そのいづれをも盡く男色の風潮の結果であるとすることはできない。しかし、男色の流行が男性美を讚美せしめた理由のひとつであつた。詩に於ても、戯曲に於ても、殊に戯曲でははつきりと男色を讚美したものを多數に發見することができる。これは、流行といふ社會的心理のしからしめたばかりではなく、作者自身が同性愛の熱情者であつたからである。

詩人アナクレオンとか、戯曲家ソホクレスやユ。リビデスとかは、彼等は彼等の男色性愛の對象の讚美を藝術的作物の上に移したのであつた。これらの社會と文化の因果關係が、古代ギリシヤ時代を通じて男色の流行をなしたのは當然な性愛的傾向であつたといはねばならぬ。

おそらく、古代ギリシヤでは、女性愛よりもたしかに男性美をもつて、性愛の極致としてゐたのではあるまいか。藝術と裸體とが同意語であつたし、そ

の裸體美はまづ男性美にあつたらしい。

寢室と浴室

ローマ時代に於ける淫蕩文化は暴王ネロをもつて最盛期に達した。

ネロは宮廷に幾多の美女を集めたばかりでなく、美少年を召した。男色は暴王のもつとも好むところであつた。美少年を時に掠奪して寵愛し、而も幾何ならずしてこれを惨殺して慾望を満足させた。當時、遊女は権門に出入し、宮廷は賣淫のよき市場となつてゐた。宮廷が一大享樂境となつたことに對應して、貴紳は美少年を携帶することがその必要なる儀容であつた。即ち、性的慾望以外に、美少年を同伴してゐるといふ一種の虚榮を尊んだ。このために、男色に對する要求は甚しく増加した。男色が虚榮のためにすることは羅馬時代をもつて最とするのである。

従つて、羅馬時代の性愛藝術は古代ギリシヤ以上に暴露主義的であつた。肉慾即藝術といふ観がないでもない。發掘されたポンムベイのカザ・ヴェッタイの壁のフレスコのごとき×××をもつた子供を示したもの。また羅馬の×××の壁のフレスコは殆んど全部が××の模型といつてもよい。

宮廷が淫蕩文化の中心であつた。××のごとき、××のごとき決して日影の商賣ではなかつた。堂々たる公の職業であつた。

伊太利ナポリ博物館所藏の「サチールと山羊」の彫刻のごとき、羅馬ヴェチカン美術館のある「フェウンとニムフ」のごときは、古代羅馬の性愛觀の典型的な遺物だといはれてゐる。羅馬人の浴槽の快樂とそれにつれての性愛技巧は、おそらく歴史始めて以來これにまさる民族はなかつたといつてもよからう。

浴室のエロティズムス

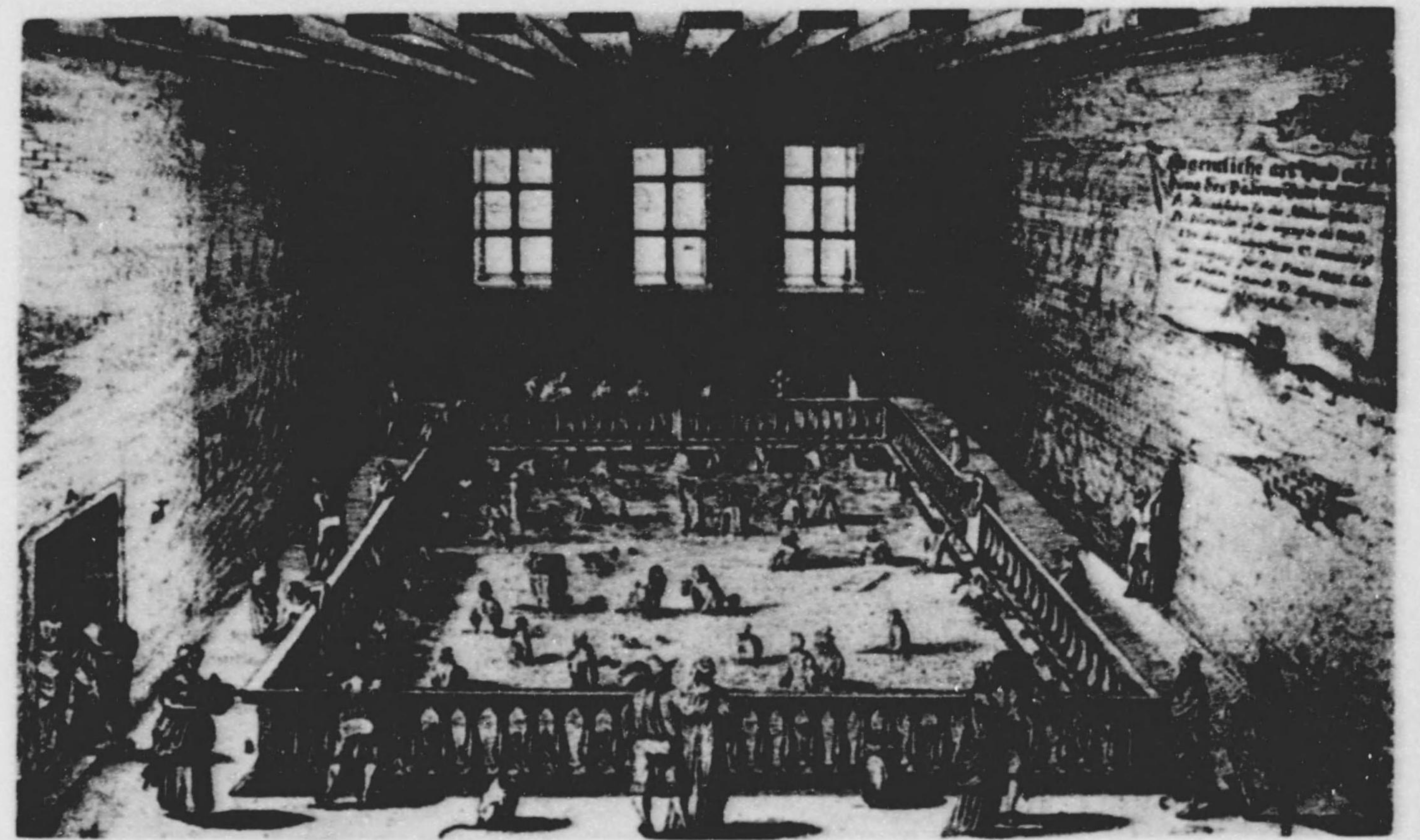


古代版畫



古代版畫

浴場のエロティズム



浴場のエロテイズム



羅馬風呂が土耳其風呂とともに、今日でもある種のエロチシズムをもつてゐることは周知のことだ。浴室と寝室との華麗は、そこに浴室と寝室の快樂が割出される。ビヂエがフランス好みとして現代的な明快清浄な浴室兼便所であるが、あれはなんとしてもラティン系統がローマ民族からうけ継いだものではなからうか。

羅馬人の寝室は、その壁畫に四邊をとりまかれて、その壁畫がすべて、殆んど全部といつてもよいが、××技巧を描いたものが羅馬人の氣質にかなつてゐたらしい。

窺視的興味

中世暗黒時代からは、僧侶が性慾の樂園であつた。ことに、僧侶階級の特權的地位は、ルーテル以前の獨身制によつてソドミーは實にさかんであつた。修道院尼僧院の儀式上に追ひつかはれてゐた少年達は、いづれもわが國の封建時代の寺小姓と同一であつた。

中世の歐羅巴では、僧侶が一方で××に耽溺してゐるうちに、いよいよ藝術は性愛藝術に傾いてきた。文藝復興期の繪畫が、痛く僧侶階級の好色ぶりをいかんなく表現したのはそれであつた。受胎告知のマリアが肉感的になつてきたり、マリアの乳房が爛熟した×××を現したりしてきた。乳房の露出は、當時の肉體美の象徴であつたといひ得る。また、この時代からして貴族階級の美人が進んで、乳房露出のモデルとなつて、乳房、太腿、白脛が美の表現であつた。

だが、僧侶階級の××は永遠の快樂として今日までも歐羅巴ではつゞいてきた。僧侶の××に對して尼僧の××はまつたくヒステリックなものでかき

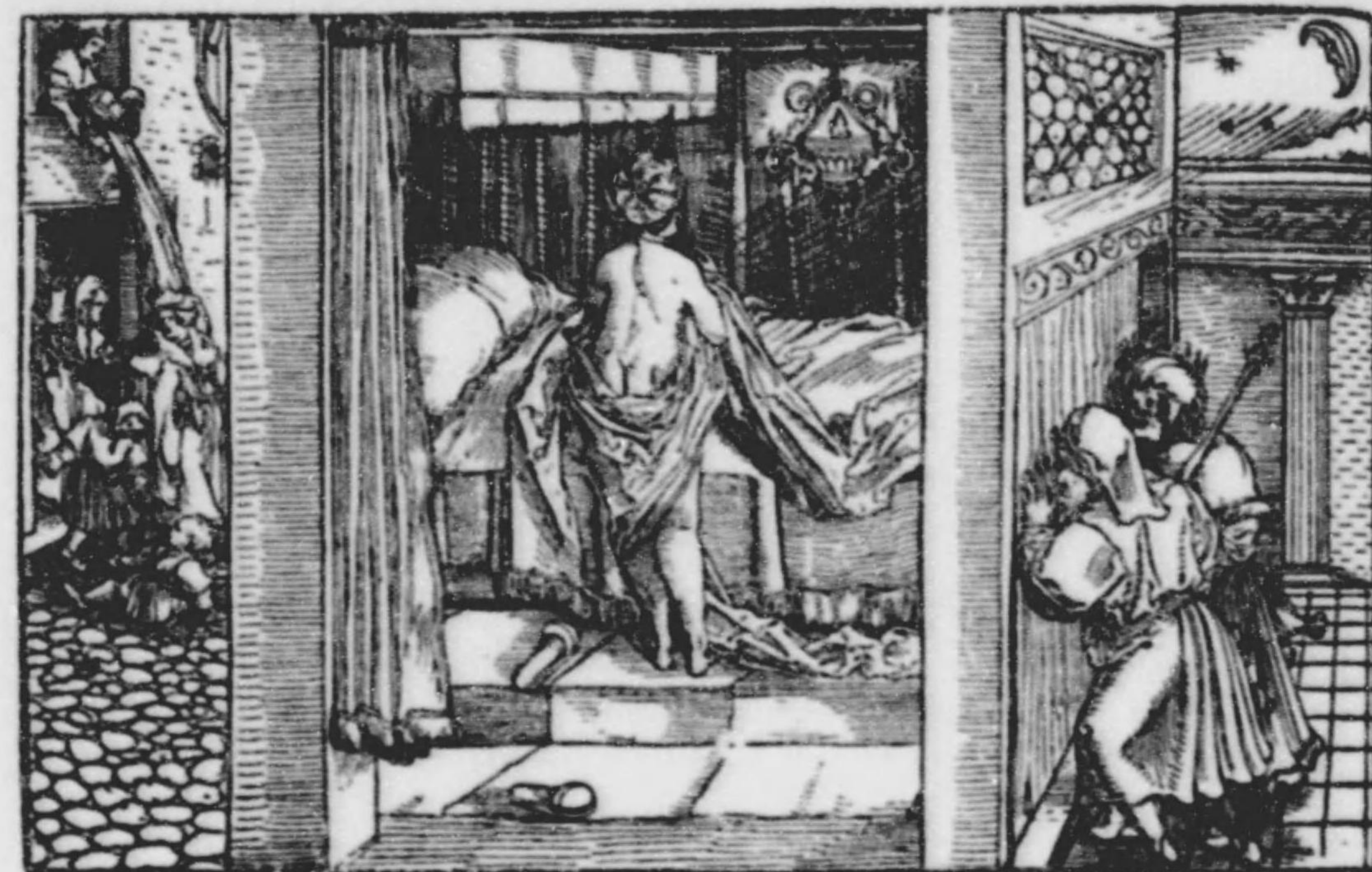
現すこともできない。

尼僧の變態性愛技巧の發達はやがて藝術にも變態的な變遷があらはれてきた。それは、ロココの藝術でもつとも主題的になつた女の最後の瞬間を表現せんとするを繪畫化してきた。それが窺視的興味である。××するのを鍵の孔からのぞいたり、浴槽の女を扉の××××××たりするを性愛的に繪畫化したのである。

男 色 俱 樂 部

現今歐米では男色はかなりの組織的に行はれてゐるものが多い。獨逸佛蘭西には男色の俱樂部とか乃至は秘密結社ともいふべき團體がある。それが宛然として社交機關をなしてゐる。一方では大仕掛に少年を供給に當る不良誘拐團がある。この不良誘拐團が國際的に活躍してゐる。概して、男色を漁る變態性のもものは、その對象の供給の乏しいために、進んで誘拐と奪掠を敢行して、團員を満足させると同時に他に轉賣してゐる。團長の外にその補佐、外勤、内務、會計等の役割があつて整然たる組織をもつてゐる。公園河岸等に出没して少年を誘惑する。一度目をつけた少年は如何なる防備をも潜つて手に入れ、温順に行かなければ、その四肢の自由を奪つて目的を達する。手に入れた少年は一定の訓練を與へて後、會員に分配される。時には數名の××に逢つて、××××に激しい苦痛を蒙つて死に瀕することさへもある。これらの不良團體は、集會の名を學術研究にかり、或は晚餐會と見せ、大仕掛に行ふものであるが、會員に上流の子弟が多く、檢舉を甚しく困難にしてゐる。

佛蘭西獨逸に於ては、このほかに、カフェーに出入する男娼的男子の存在が有名である。妖艶なる女性に姿をかへ、一定の知人以外には全く女性として



古
代
画

窺
視
的
興
味



透 利 畫

窺 視 的 興 味



生活して、××××××××××ゐるのである。カフェーには、これらの女性としての男子がダンスの相手をしてゐるのは普通にみられるところである。これが男色××としての總ての條件を満足させるか否かについての充分なる××は省略しても、男色賣淫の傾向が現在の歐羅巴にも相當顯著であることが明らかである。

都會生活を享樂する心理

都市とブル階級……享樂機關が生んだ「新しい群集」……

都市と賣笑ギルド……酒場・カフェの享樂心理……銀座に

現れた變態的流行現象……都會人の獵奇心と變態心理

都市とブル階級

カフェ、酒場、レストラン、ダンスホール、喫茶店、キャバレー等のモダンな享樂機關は、いよいよ現代の遊廓、貸座敷、居酒屋、繩のれん、小料理屋、踊りやその他の諸遊藝の師匠、矢場、銘酒屋、寄席、茶房、待合等の封建時代的からの享樂機關と置換されてきた。遊廓以下のいろいろの享樂機關が、あたかも封建時代の都市が所産した都會生活的享樂の諸機關であつたがごとくに、カフェ以下は現代都市が所産した都市的享樂機關の諸現象である。

現代的都市への萌芽は、すでに封建時代に於て發達した城下町、城廓都市、自由都市等が支配階級であつた特權階級——王族貴族僧侶武家の諸階級——に對立した新興のブルジョア階級の經濟的自衛力が發芽した時に萌えてゐたといつてよい。ブル階級が經濟的に強大な自衛力をもちはじめた時には、ブル階級は、城下町とか城廓都市を特權階級の實權から奪つて、それらを自由都市とみな一様にブル階級の經濟的勢力によつて都市の武士的支配勢力を排除しつゝ、特權階級を薄弱なものと化した。そこに現代的都市への發足をきたした。都市の生活群としては、ブル階級は現代的都市の始めには社會的勢力や政治的勢力では武士的支配勢力に劣つてはゐたがすぐれた經濟的勢力をもつて支配階級に對抗する隱然たるものとして彼等の都市生活的諸現象のうちに抱擁してゐた。

かやうの時代からして、それが封建社會にあつても、ブル階級はその地域的根據の都市で、地方や農村の生活群とはちがつた特殊な享樂機關を必要とすることはいふまでもない。わが國の封建社會で、封建諸侯とそれを取りまく武家階級とは、城下町城廓都市でも、多數ではあつたが劣勢の中産階級であつた

町人階級とて、都市を構成してゐた。わが國の封建時代の城下町の町人階級としての地位勢力は、獨逸の中世紀時代の都市の定住商人階級とまじ性質をもつてゐた。わが國の城下町の町人階級が定住商人として武家階級に對抗してゐたのは一にその經濟的勢力にのみよるのであつたことはいふまでもない。支配的關係では、定住町人階級はまつたくの無能力者群であつた。武家階級はすべてに於て優越的地位を保つた。彼等の社會的權勢はいかに新興のブル階級と雖も定住町人階級には許すところがなかつた。しかるに、このわが城下町の定住町人階級は獨逸の中世紀時代の都市の定住商人階級と同じやうに、社會的地位は到つて卑下されてゐたが、獨逸の定住商人階級と同様に一箇の優越的勢力を特殊な社會的機構を通じてのみもつてゐたのである。

それは、ブル階級が政治的勢力では依然として被支配階級であり被搾取階級であつたが、ブル階級は都市生活の享樂關係では獨特の勢力をもつて、わが町人階級は武家階級の侵入侵略を嫌惡した「遊廓享樂」をもつてゐた。この遊廓中心の享樂こそ町人階級の獨占的なもので、その芝居化されたものとして、大口屋晩雨とか助六とかがいかによく町人階級が武家階級を「無粋」として彼等の獨占的享樂環境から排撃したかを物語る。

享樂機關が生んだ「新しい群集」

わが國の封建時代の都市に遊廓を中心にした享樂がブルヂョア階級とブチ・ブルヂョア階級の獨占的享樂として勢力をもつてゐた頃に、カフェは西歐諸國の都市ではブルヂョア階級から分裂した。さうして、ブチ・ブルヂョア階級の都市的享樂機關として進展してゐた。

カフェの起原は、トルコにその都市的起原があつた。トルコの君府にあら

はれた珈琲の喫飲舗——*kacha-kanes*——は、その以前からアラビヤ、ペルシヤ、エジプトで流行してゐた都市の路上カフェの進化的現象であつた。それが君府にあらはれると珈琲喫飲舗として珈琲といふ特異飲料の魅力をつたのしむといふほかに、附帶的ないろいろの享樂的條件が附せられてきた。室内で快い柔い體の沈まるやうなフォートイユ・ソフ、をそなへたり音楽が断えるまもなく弾でられてゐた。

さうして、そこに集散する人々は支配階級特權階級に屬してゐないブルヂョア階級やブチ・ブルヂョア階級であつた。かくして、彼等は曾て夢想だになかつた魂の慰安所が都會生活の一形式として許された。その慰安所はインテリゲンチヤの群集的心理の接觸機關として、新しい群集を構成してきた。この新しい群集はトルコの都市君府のブルヤブチ・ブルの階級が主層となつて、それには新鮮な享樂を味覺に視覺に聽覺に躍動させてゐた。

わが國の封建時代の町人階級が廓といふ特殊の享樂機關で支配階級搾取階級への全面的反抗心理を映出してゐたのに對して、トルコの君府ではカフェたるカハ・カーネスに集散する新しい群集がブルヤブチ・ブル階級として支配階級への反抗的意義を都會的享樂に求めてゐた。廓の享樂が町人階級の流行の源泉であつたごとくに、新しい群集を構成したカハ・カーネスは流行と歡樂の極樂であつた。カフェにも媚態と妖艶にとんだ女群があらはれ、猥褻な情趣は芳香の飲料と音楽、小唄、手品、蛇遣ひ、舞踊といつた地上の惡の華をさかしてゐた。

遊廓を中心にした享樂が支配階級からつねに彈壓されたわが國の過去のやうに新しい群集を本質にもつカフェはどこの國でも彈壓の對象であつた。カフェはあたかも新聞紙が本質的に權力と對立するごとくに、カフェもその始から權力——それが政治的權力であつたか宗教的權力であつたかいつれかで——と

對抗してゐた。

ことに、カフェの發達史の起原時代ともいふべきトルコの君府のカフェは、マホメット教の信條たる夜の祈禱を怠らせる弊風をつくるものとして宗教的に彈壓されたことはカフェ彈壓史の一頁を占め得る。トルコ國王アムラタ二世が君府のカハ・カーネスが排職論の發生傳播の源泉として、カハ・カーネスの閉鎖を嚴命した。その封鎖を破つてひそかに享樂するブルヤブチ・ブル階級の意識は封鎖しきれなかつた。カフェはすでにその初期にあつてブルヤブチ・ブル階級の都會的享樂機關であつたと同時に一種の言論輿論構成の機能をもつてゐたことは廓の文化に支配階級の權力を無粹として排斥したと同理であつた。

オールド・ロンドンでも、現代のわれらのカフェ、酒場、レストラン、ダンス・ホールに該當する珈琲店が激烈な反權力的の言論風説の醸成にあづかつて力あつたことはオールド・ロンドンの珈琲店の變遷史にもよく發見することができる。さうして、珈琲店が封鎖閉鎖の彈壓をうけてゐたことはたしかだ。新興のブルジョア階級が支配階級から彈壓をうけた一分裂がカフェといふ都會的所産の享樂機關に及んだことはいづれの都市のカフェでも窺ひ知れる。

都市と賣笑ギルド

西歐諸國では經濟的狀勢の展開から都市が急激に勃興してきた時代から農奴は農村を去つてこゝにのがれて新しい手工業によりよき生活條件を求めてやまなかつた。都市は領主と僧侶から權力的におさへつけられても經濟的に獨立して、封建政治の不當な搾取と壓迫が比較的になかつた。市場の發達と家内工業制の進歩は、都市に人口集中をきたし、生活するために便利であり、結婚の自由と機會にめぐまれたことは都市生活の大なる恩恵であつた。すくなくも、

こゝに經濟的にギルド社會組織が現出した。ギルド社會組織とは經濟的職業的の團結組織で、都市の現出がさそつた市民階級の封建的生活形式であつた。

ギルド社會組織は中世の都市生活の核心であつた。このギルド社會組織における賣淫はまさにギルド組織——賣淫群の組合化、賣淫の專賣化——によらなければならなかつた。この賣淫の組合化こそ中世紀の都市勃興にともなつた賣淫の經濟的根據が樹立された飛躍であつた。

中世紀の都市のギルドは、領主貴族僧侶等の權力に對抗する市民階級の團結であつた。それは庶民階級の自己擁護であり、生産力の獨占であり、商業的自由競争の防止であつた。そして、組合化した相互扶助を目的としたひとつの社會組織であつた。組合員は、原則として同一區域に居住して、商業的に職業的に一切の便宜、利害關係の機會均等の保證等を獲得してゐた。組合はいはゆる親方制度であり、各組合には組合長を置いて、規約、事務を勵行した。かくして、ギルドの地位を保護してきた。

賣淫においてもまだこのギルド化があつた。それが大都市には、市營、公營、寺營、窩營が大規模につくられ、その収入は、それぞれ經營團體の收入として保護費發展費としておさまられた。一定地域に娼家を組織し、組合長は年長の取締を選出した。相互扶助と自由競争防止のギルド組織の目的はいかなく賣淫にあらはれて、組合員以外の賣笑婦は、賣淫組合やひいてはその背景の經營團體の力によつて極端に壓迫された。獨逸のニールンブルグの娼婦組合が、組合員でない娼婦を知事に訴へた。

「……夜間街上で妻帶者その他の男客を引とめ、極めて下品な方法でその業務を營む婦人を都市に放致默認することは、不體裁で、この立派な都市には許されまじきこと……」といはれた。これはいかにも賣淫ギルドの全幅を遺憾なく傳へてゐるものである。

その昔、バビロニアでまたはユダヤでひろく流行した賣淫賣笑は、この都市では賣淫ギルドの娼婦達によつてなされた。それが公費たる市の費用で、都市訪問の外國名士や賓客に提供した事實は有名なものである。英吉利のチャールス五世が白耳義のアントワープ市を訪問したときに、アントワープの市代表として賣淫ギルドのもつとも清新な娼婦が裸體のままにチャールス五世を外國國王として迎へたといふのだから、わが國で外客もてなしの藝妓の手踊は上々であるといふべきだ。

そののち、ギルド組織の發展は、都市の發達に應じて集つてくる新移住者を競走者と見做し、これが障壁をつくつて、權利と引かへに重税を課した。そして組合員の數の制限を行つた。かくて居住と職業の權利を失つて多數の失業者が浮浪するに至つた。これが他の政治的不安と相俟つて民衆生活を脅かし、女性にとつては賣笑は残された唯一の生活の手段となつた。

間接的失業救済手段としての賣淫賣笑は、支配的優越の地位にある貴族軍人富豪商人の享樂的傾向の需要に應じて、ますます發達した。勿論、この時代の賣淫に對する觀念は「有夫の婦人を保護し、處女の名譽の爲に」望ましいものであるとされた。この中世紀的の賣淫的觀念は現今の社會に於て、多數の人人によつて支持されつゝあるのである。

宗教改革は賣笑に對して大きな影響を與へた。一五一七年以來のマルチン・ルーテルの思想は、僧侶を性的禁壓から解放し、家庭を肉慾の不滿から救つた。二重結婚や一夫多妻が正當なる意義を附與された。しかし、一方に於いて、賣笑婦は墮落した婦人と認識され、惡魔の娘として迫害される霧圍氣をつくつた。惡魔の棲家である娼家は、宗教上の新舊の爭議の犠牲となつてギルド社會のものでかつての華かな状態を續けることが不可能になつた。

ついで十七世紀には、三十年戰役の結果からして西歐各國の社會状態はそ

れぞれ變化した。ことに、經濟的混亂と道徳的頹廢は、獨逸を中心にして極度の性的亂交時代を實現した。貴族と農民とは互ひに利益を奪ひ合ひ、のこされた土地について無秩序な争ひをした。無數の農民は領外追放されて彷徨し、婦人は食に饑えて浮浪漂泊の旅をはじめた。監獄は、それらの浮浪者をもつて滿された。この時代は、婦人の極端なる受難時代で、生活的には賣淫以下の非人間的の動物行爲さへ生きてゆくためには男性に與へて、男性の助力をうけねばならなかつたのである。

低地獨逸地方や北歐地方では、その頃は一人の男性が多數の妻帯を法律が認めた。それは、××××を敢て認めて「のこされた」婦女の生存を社會的に與へてやつたのである。當時、西歐諸國の農村では賣淫は成立しなかつた。賣淫を必要とする社會ではなかつたのである。

酒場カフェの享樂心理

今日われらのカフェ酒場喫茶店キャバレー等が彈壓をうけながらもプチ・ブル階級の避難的享樂機關として存續してゐるが、何故に彈壓と壓迫とがありながらも散策をきはめてゐるのであらうか。そこで、現代の都市生活のプチ・ブル階級がカフェ酒場キャバレー喫茶店等を中心にしたいはゆるさかり場などにゆくべき慣習的心理も一考してみたい。

かつて、ロマンティズムの理論をかいたベヤース(Beers)の説だつたと記憶してゐることがある。それは、彼は文藝上のロマンティズムの理論は、人間の好奇的心理や獵奇的意欲はいつも空間的距離と時間的距離のづばぬけてかけ離れてゐる想像的心境をいつも求めてやまないのだと説いてゐる。

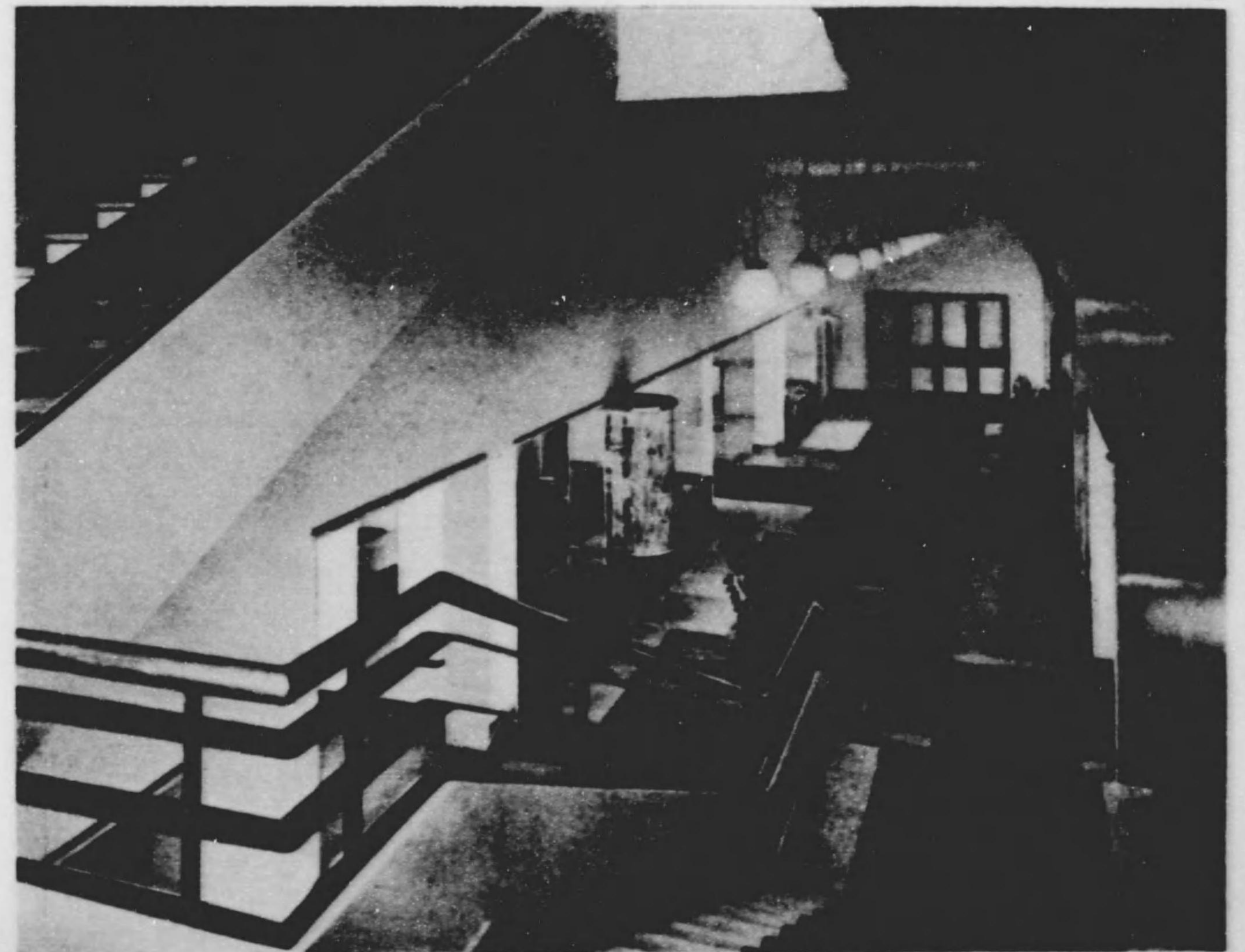
英文學上でもつともロマンティックな作家のバイロンがよく作物のロマン

タイズムを遠い昔の希臘時代や羅馬時代に人物と舞臺とを求めたのは、時間的距離が時代とづばぬけてかけ離れてゐるところに、人間の好奇的心理や獵奇的意欲を動したのであるし、キーツあたりが好んでアラビヤやエジプトのごとき異国情調の湧いてゐる想像以上の國々に作物の對象をゐたのは空間的距離によつて、人間の意識外にできることをねらつたのだといつてゐたと覺えてゐる。

この時間的距離と空間的距離とがつくりだす人間の好奇的心理と獵奇的意欲の動きが、現代の都市生活のブチ・ブル階級の生活意識とカフェや酒場とか乃至は家庭からかけ離れたいろいろの享樂的機關へと動いてゆく一種のロマンタイズム、即ち現代の彼等の家庭をつゝむ現代といふ時間的生活意識にも家庭といふしごく近い距離的生活形式にもなんらの刺戟も誘惑も感覺しえぬ心理が、現實に不満の心理から、家庭からは距離の上で遠い銀座に道頓堀に新宿に京極にと空間的距離のもたらすカフェや酒場等の享樂機關へとゆく。そこには、ブチ・ブル階級の現代的家庭生活にはあらはれてゐない特異な情調が戀愛的にまでゆかぬとしても「女」と「色」と「酒」とその他の刺戟とで官能的満足を求め得る。だから、カフェにしても酒場にしてもキャバレーにしてもそのもつとも股榮をもたらすのはブチ・ブル階級の住居的中心地から地域的に距離をもつことが第一の必要條件となる。郊外のブチ・ブル階級にとつては、新宿も銀座も浅草もひとしく「遠い距離」の感覺を與へる。だが、やはり流行心理の支配からして非孤獨的を求めてもつと人氣のあるもつともより多數人の集散するところを求めてくるのであらう。かくして、われらの銀座なり道頓堀なり京極なりは新宿浅草とともに好條件をもつといふべきだ。

この意味で、いかに警視總監がひとり踏ん張つても、銀座街へと動いてゆくブチ・ブル階級の享樂求迎心理は、カフェや酒場や踊り場へと内容や外觀の上だけの規則づくめの干渉や、彈壓を不斷に加へても、決して絶滅すべきも

都會享樂の階級性



ない。今日の都會生活群としてのブチ・ブル階級は、活動寫眞とカフェと酒場と踊り場とを除いて何が享樂としてのこるであらうか。おそらく、安價な讀書とスポーツ・ゲームズの好愛のほかには何が許されてゐる？ まづ、カフェ酒場は全盛時代をブチ・ブル階級がブルとプロとの階級的に中間的存在する以上はつゞいてゆくと考へられる。

銀座に現れた變態的流行現象

讀つて、今日の銀座をみる。銀座街頭、あたりの人を無視して裾で風を切つてゆくモボのラップズボン、あたまで風を流すものにモガのバッド・ヘアがある。一は、はしなくも往來であつた意体ならぬ雷親爺を瞞着すべく、助六をかくした揚卷の被褥がほどの抱擁力をもつ。つれのステッキを忽ちにしてかくしをはばせるほど美事に太くなり、一ははかなくもすれちがつた神經衰弱的都人士に、男なるか女なりしかをしばし思ひ惑はせしむるに足る程鮮かに短くなつた。斯くして、往年の柳戀しき銀座時代のつゝましかつたモボ・モガは既に過去の骨董品にしか過ぎなくなり、現在はウルトラ・モボ・モガが活躍を擅にしてゐるのである。そして、やがては想像も及ばぬ奇妙奇天烈なスーパー・ウルトラ・モボ・モガ諸氏が、銀座の華々しい舞臺に登場すべきことは察知するに難くないと思はれる銀座の現状である。

この變態的流行現象は、現在に於ては殆んどその歸趨を計り知るを得ないほど迅速に進展しつゞけてゐる。奇を好む心が人間の第二の本能として儼たる存在を保つてゐる以上、それは必然やむを得ないことであるかも知れないが、この先は一體どの程度迄行つたら収まりがつくのかと、人の痛氣を要らぬおせつかいではあらうが、多少頭痛の種でないこともない。

ラッパズボンがその最初、水兵君の甲板洗ひの際捲り上げるのに都合のよい便宜の爲に、下が太く作られたものであり、断髪がその始め風除けの必要に迫られて試みられたのであることは、知る人ぞ知るである。だが、モボ、モガにとつては、そんなことはなんの問題をも含んでをらぬつまらないことたるに過ぎない。珈琲がアビシニア土人の習慣から、煙草がアメリカ・インディアン
の風習から、ジャズがアメリカン・ニグロの出題目から傳はつたのだと言つたとて、今更驚く人もないのと同じく、そんな小六ヶ敷い考證癖を趣味としない彼等が、何時のまにか「モダン」になり「シツク」になつたと感ぜられたそれ等の流行を盲信してしまつたのである。彼等には批判は不必要だ。風變りなのが「モダン」で、突飛なのが「シツク」だ。流行が、何時の時代でも、變態的に無軌道、混沌たるものであるのは面白い。

断髪ではないが、現代の断髪が男の髪に近づいたと同様の意味で、徳川時代に男装した遊女が現はれたことがあつた。断髪といへば大して珍しいことでもなく、現に明治維新の際男の断髪に伴つて女の髪を切るものが多かつたので、明治七八年頃法令を以て女の断髪を禁止したことさへあつた。しかしこの際男装妓は、すべて男の服装をとゝのへたので、その點は餘程徹底したものであつたのが興味をそゝるのである。若衆女郎と呼ばれた彼女等は、當時壓倒的に人氣の中心であつた若衆の風俗を模倣して世人の好奇心を煽つてゐたのである。

「廓中一覽」といふ本に由ると、大阪に新町廓が出来て間もない寛永年間のこと、瓢箪町大和屋抱への市之丞といふ傾城が、當時太夫以下凡ての傾城が齒を染めてゐる中に、唯一人白齒で髪を巻立てに結び、表着なしに出たのがその最初であつたといはれる。それが好事の者の評判となるに従ひ、次いで有名な錢屋抱への内藏之助などといふものが出て、この若衆女郎の名が一般化されたのである。



レビュウの魅力